

肥前風土記

ひぜんふどき

五幕七場

田中千禾夫

登場人物

助谷すけたに権九郎

グランピエル

弥吉

作右衛門

忠次郎

辰之助

そで

なみ

まき

くら

しの

農夫甲

乙

中の丘

右の丘

左の丘

捕手五人

こいの女身像と声

中次一平

真哲

侍

祐筆

同心

第一幕第一場

浦上川の堤

第二場

丘たちの対話

第二幕

さん・くらら堂跡

第三幕

辰之助の家

第四幕

西役所

第五幕第一場

第一幕第一場に同じ

第二場

同 第二場に同じ

## 第一幕

### 第一場

舞台前面、川の堤の上の道路。立木が二三本。その向こうが川の流れ。その向こう岸から緩かな傾斜でだんだん畑が上に延び、その頂は、遠く近く、三つの丘に分れ、円い頭が、中央と右と左と、のんびりと並んでいる。後年、その一つの丘の中腹に天主堂が建つであらう。

間もなく明治改元を控え、天下の大勢穏かならぬ幕末。だから末ではあってもこの土地はまだ幕府直轄の地であり、やがて維新政府にひき継がれても依然として禁教政策の下にある如き風土であった。

夏の晴れた午後。

流れの音。蝉の音。

堤の下から、吠えたてるようなしかし美しい叫び声が湧き上がる。フランス語とそして馴れた日本語である。これは、しばらく前に、この浦上から歩けば二里、長崎の港を眼下に見おろす大浦の高台に天主堂をたてたフランスの神父、ローマから派遣された布教師の人で、名前を仮りにグランピエルと呼ぶ、その人の声である。

グランピエルの声　おうすくうる……おうすくうる……たすけをよぶもの、これにござる……お  
うすくうる……たすけてくれよ、たすけておくれよ……おうすくうる……たすけをよぶもの、  
これにござる……ござる候よ、候よ……

鋤や籠を持った二人の農夫が、上手から駆けつけて堤の下をのぞく。無論、まだ丁髷ちよんまげを結  
う。

グランピエルの声　ぶおあら、めしゅう、ぶおあらあ！

農夫甲　あつたいやあ！

農夫乙　オランダ人ばい。

農夫甲　オランダ人かあ。

農夫乙　オランダ人ばい。

二人は、触らぬ神に祟りなし、上からちよつとのぞいただけで、さっと元へ引き返す。後  
からグランピエルの声が空しく追いかける。

「あたんでえ、めしゅう、みなさま……あの、みなさまあ……」

下手から、作右衛門（六十歳）、忠次郎（五十歳）、弥吉（二十五歳）、そで（十七歳）前の

二人に気を配りながら、現われる。鋤や鎌やさつま芋の蔓などを持つ。

作右衛門　ここばい、ここばい。

グランピエルの声　ぶおあらあ、めしゆう、ぶおあら！

弥吉　あつたいやあ！

忠次郎　あつたあ！

そで　あつたあ！

グランピエルの声　ぼんじゆうる。こんにちは、浦上のみなさま、こんにちは。はて、うららかなる天気にてありまする。

作右衛門　あつたあ、オランダ人ばい。

グランピエルの声　おう、ノン、ノン、ノン。

忠次郎　出島から何しに来つとじやろうか。

弥吉　やっぱ、辰之助の植木ば見に来らすとじやろ。

作右衛門　辰之助はもう植木はやめたとじやなかなあ、なあ、そで。

そで　（曖昧に）へえ……：：：そうのごたるです。

弥吉　そうのごたるで、死んだ姉さんの代わりに辰之助の身の回りの世話ばしとるじやなかか。まっで（まるで）おかみさんのごと。

そで 嘘ばい。義兄様あんしやまが姉さんに死なれて可哀そうかけん、ご飯たきや洗濯ばして上げとるだけ  
たい。一日、一言も口はきかんとです。

作右衛門 おかしかなあ。なしてか。

この間、グランピエルの声は、「ええ・びやん・めしゆう…：ええ・びやん！」と呼びかけて、注意を喚起するが、一同は呑気そうに自分たちの話をつづけている。

そで 義兄様あんしやまはうちが好きじゃなかと。

弥吉 おうちは好きじゃろ。

そで 嘘ばい。うちが家んなかば片づけて、暗うなつてうちの家に帰らにやならん時分に起きて  
来て、そるから朝まで、猿もんきや鳩の死に殻作りむんきに夢中ですばい。昼日中に寝つとです。

作右衛門 女房に死なれてから辰之助はおかしか。

忠次郎 死に殻は儲かるもんな、出島に持って行けば。

そで ばつてん、夜と昼と取りちがえて、からだに悪かです。

弥吉 おうちが姉さんの後釜に坐つたら、ちようどよかとに。

そで しらん。えつと言いますな。おうちこそおなみさんと早よ夫婦になりまっせ。(怒って離れる)

忠次郎 ほれ、あぎゃん、顔一杯鬚生やしとつとは珍しか。濃いかなあ。

そで 偉か人ばい、きつと。

作右衛門 川で釣でんすつとじゃろか。

忠次郎 うんね、薬草ば採りに来たとたい。お医者ばな、きつと。

弥吉 鳴滝におらしたオランダ人のお医者も鬚ば生やしとらした。

作右衛門 見たことあつとか、わら。

空になった籠を天秤棒に通して肩にかついだな、み、(二十歳)が後から来て覗いていた。  
大柄できれいな肉づきである。

なみ (そつと) シイボルトウ……シイボルトウ……

そで うんね、シイボルト先生じゃなか。

忠次郎 なん？

作右衛門 おう、今、帰りか、早かったな。

なみ ない。

弥吉 皆売れてよかったな。きつかったろ。(非常にやさしい)

忠次郎 おそで。あのオランダさんな、辰之助のとくいじゃなかとか。

そで うんね、見たこたなか。

弥吉 (なみに) さ、俺が持ってやる。一緒に帰ろ。おっ母さんが待っとる。

作右衛門 辰之助にな、善よか盆の晩にや、(そっと) クララ様に来るごと言うてくれんか。この頃はドメゴの寄合いにもいっちょん出て来ん。

そで ばってん、あんしやまとは、うち、えっと口もきかんとです。

なみ あんげん男は一人にしとったほうがよかと、一人に。

そで なしてへ？

なみ ふふ……自由ですたい、ふふ……

弥吉 自由！

そで 姉しやまが死んでから急に陽気になりました。よう喋ったり、そうかと思うと急にだまりこんだり。

弥吉 目つきがいやらしゆうなった。

なみ うんね、生き生きして来たど。生き生き！

弥吉 おうちは、やっぱ辰之助んどけ行っとなか、やっぱ。

なみ (つかまれた腕をはなし) 知らん。

忠次郎 弥吉。ようつかんどかんと、こげん女子はどけ行くかわからんぞ。

なみ あぎゃんこつば…… (やむを得ず弥吉に話しかける)

作右衛門 (そでと話していたが) ふーん。あらあ、凝り性じゃけんなあ。

忠次郎 だちゆうて、おつとめば怠けてはようなか。

作右衛門 惚れた女房に先立たれりやそげんことになつと。

忠次郎 そで。おうちが早よ年とつて嫁さんになつてやりやよかとじゃ。

そで 知らん。

作右衛門 はは……

連中の関心はすでに下の異人にはない。

なみ どんげん葉ばのうでも受けつけんとです。もうお祈りするよりしよんなか。

弥吉 俺もいつでん宵の祈禱おらつしよにはおうちのおつ母さんのことば祈つとつと。

なみ すんません。

作右衛門 やっぱ悪かとか、おつ母さんは。

なみ この盆まで持つかどうかわからんとです。この暑さがこたゆつとでしよ。何も食べんとです、何も。うちやもう、あきらめとります。

忠次郎 死人はばつてん仕合わせはばい。俺達おつたち百姓には、この世の仕合わせはなかとじゃもんなあ。

作右衛門 後生のたすかりのありさえすればよか。文句言うたところでしょんなか。

忠次郎 一反の田圃から、地主にとられ御上納にとられ、おったちの手取りは年に三俵。そるでん、この焼けるごたる陽の下で草とりに腰ばかがめてごそごそ這わにゃならん。

作右衛門 言うな、言うな。

忠次郎 じゃけん、死んだほうがましじゃと言いつてもなるたい。ばってん、死んでからに天主に召さるつとはよかばってん、葬式となりや、やっぱ聖源寺に届けて生臭坊主のお経ば辛抱して聞かにゃならん。

弥吉 そうたい、辰之助の女房が死んだときでん、あのいやらしかたこ坊主が勿体振って来たじやなかか。

作右衛門 ばってん、そげんしてだまさんことにゃ、浦上の切支丹は生き延びられんとい。仕方なか。

弥吉 死んだ仏も浮かばれん。(石を川に投げる)

グランピエルの声 おう！ おしゅう！

作右衛門 これ。(あたりを見回し) 善か盆にゃ、クララ様に集まって、死んだ仏のために皆で彌撒みさばお上げしよう。

なみ うちのおっ母さんのためにもなるかもしれんなあ。

そで あんしゃまは出んかもしれん。

弥吉 なして？ ……自分の女房のことじゃなかか。

なみ 出するごとなかなら、出てんでんよか。

弥吉 ふん。あいつの了見がわからん。なんか企んどる、なんか。

忠次郎 さ、日の暮れまで、もう一骨折りせにや。盆の来たら、また（丘の方を見上げて）あす

こで会いまっしょ、な。（下手へ去りかける）

作右衛門 ない、ない。会いまっしょ。お互いに達者ならな。はは……辰之助に忘れんな。

遠くで鉄砲の音。

なみ ありや！

忠次郎 また助谷ばい。

弥吉 この暑かとに、ご苦労なこっちゃ。

作右衛門 庄屋と鉄砲はつきもんたい。

一同笑って、話しながら下手へ退場しかける。

なみ 作爺様、おっ母さんのため、うちや一生の願いのあるとばってん……

作右衛門 一生のな。

なみ ない。(小声で) フランス寺のぱあてる様に來てもろて、おっ母さんの科とがのけがればきよめてほしかとです。サガラメントの五番ば。

作右衛門 エステレマのウンサン(終油秘蹟)は、ぱあてる様だけのお役目ばってん。

忠次郎 冗談じゃなかばい。フランス寺のぱあてる様がこげん田舎まで來らすもんか。

弥吉 俺おるが呼びに行こか。夜、人目は忍うでかくれて行けば……

そで ばってん、フランス寺のまわりは、夜でん昼でん、代官所の役人が見張つとるげなけん、やっぱむつかしかなあ。

忠次郎 そうたい。俺おるもこの前、坂の下まで行ったことあつとばってん、おとろしゅうしてはって逃げたとばい。

なみ うちも。

忠次郎 お前もか。すぐ下の日蓮宗の寺に番所の出来とつと。

作右衛門 うん、よかことのあつぞ、よかことの。

なみ へっ。

そで なんへ?

作右衛門 「さんがすば様の削り」たい。

忠次郎 ああ!

弥吉 なんへ、なんへ！

作右衛門 辰之助の家の遠か先祖はな、ガスパ荒木ちゆうて、寛永の時分、長崎では、つけの火炙りにおうたお方じゃ。

そで へえ！

作右衛門 うん。その十字架の焼け残りば仕置場から盗うで来て大事にしもうてあるのが「さんがすば様の削り」たい。がすば様まるちいるの血が染み込うだ木じゃ。

そで うわあ！

作右衛門 おそで。兄貴に聞いてみる。家宝になって今でん伝わっとる。

そで うちゃ、いっちゃん知らんじやった。

なみ その木がどうしたとですか。

作右衛門 その木ばちつとばかし削って、煎じて吞ますつと、病人に。

弥吉 煎じて。

忠次郎 その削りのおかげで助かった者が大分おるけん、削りのほうでも大分減つとるばい。

作右衛門 ばってん、ほんの指の先ぐらいでよかと。本家のばあはそるば吞うで中風がとまつた。

なみ へえ！

忠次郎 信助の倅は、そるば吞うで啞が物言うようになった。

そで へえ、啞が。

弥吉 奇蹟ですたい。

作右衛門 なみ、おっ母さんにも呑ませてみんか。

なみ へ。のませます。ばってん、辰之助さんが……（そでの方を見る）聞き届けてくるっじやろか。そんげん大事かもんば……

そで （冷たく）おうちが自分でたのうだらよかじやなかですか。仲のよかけん。

なみ おっ母さんがもし助かったら、うちや……あん人のことはもう……

そで （なみをにらみつけている）

弥吉 なんなら、俺も一緒<sup>おる</sup>にたのうでもよか。

なみ たのみに行ってもよかですか。

そで うんね。うちひとりですよ。義兄<sup>あんしやま</sup>様は誰<sup>だる</sup>にも会いとうはなかとです。誰にも。

忠次郎 恋女房に死なれたちゆうても、もう一月以上もたつとに……そのう、昼は寝て、夜起きていったい何ばしととじやろ。やっぱ毛物の死に、殻<sup>か</sup>ば作つとととか。

そで （何かをかくしながら）とにかく、うちが聞いてみますけん。

なみ たのみます。

そで さいなら。（さっさと歩きだす）

なみ さいなら。（後姿を見送る）

二組に分れて、挨拶しながら去る。

再び鉄砲の音。今度は近い。

グランピエル、ごそごそと這い上がる。五十歳の大男。円い顴広の帽子。頬から顎にかけて見事な鬚。手首までの長い筒袖、足首まで重く垂れた長い黒服。(夏季なら役者には気の毒である)帽子をとり、汗を拭く。

グランピエル　ぶうっ！　さんがすば……さんがすば……(思いついて)ああ、うい……(胸の下にかくしていた大きな十字架をひっぱり出し)このたびは、こう、わざと出してみよう。恐るることはない……帯は……(と腰のあたりを押え、左の脚をめくる。本当なら胴に捲く白い幅広の帯を、脛にくるくると捲いている)これはまあ、いまだかくしておこう……(あたりをすかして見て)べるそんぬ？　……誰も？　……(十字架を拝み)主よ、助けたまえ。二百年この方、かくれひそみてある神の僕らしもへをわが前にみそなわさせ給え。われに勇気を与え、わが試みを成就させ給え。アメン。(再び探す)ていやん！　参られて候。あん、ずう、とろあ……このたびは、このたびこそ……(われとわれを励まし、大袈裟な身振りで、今にも踏みはずして落ちそうな恰好をしてみせながら)あぶないぞよ……下はけわしき流れでござる……その下には淹もござる……あぶないぞよ……落ちたら岩で頭を割りますぞよ、おととと……落ちま

するぞよ、わたくしは、今や、今や、……やっとな。(とばかりに飛びおりのではなく、そろそろとすべり落ちる。下から) おうすくうる……おうすくうる……たすけをよぶもの、たしかに、たしかにこれにござる候よ。

三人の、これは年配の農婦たち、しの(五十歳)、くら(四十五歳)、まき(六十歳)、前の娘たちと同じく花売りの天秤棒をかついで駆けつける。

しの あったいやあ!

くら あったあ!

まき あったあ、オランダ人ばい。

グランピエルの声 おう、ノン、ノン、ノン。

しの さ、行こ。帰ろ。

くら うん。(行きかける)

まき 待って。(二人をとめて、そっと、自分の胸のあたりを指し) よう見ってみませ。

くら へ?

まき ほら。

く、ら、と、し、の、見とどけて、

く  
ら  
し  
の  
} くるす  
十字架！

まき しいっ！

グランピエルの声 おう！ くるすでござる。くるすでござる。

三人は怖くなって遠のく。そして額をあつめて囁き合う。

グランピエルの声 浦上のみなさま。わたくし、オランダ人ではない。ポルトガルでもなければ、

エスパニヨルでもない。フランセエ、フランセエ！

まき たしかにくるすばい。この目に間違いはなか。

しの ばってん、オランダ人でん、くるすばかけとる。

くら 知らんぷりしとったほうがよか、よか。

グランピエルの声 わたくし、探し求めてあるは、みなさま方、ちがいはござらぬ。もうし、  
このご婦人方。

まき よか。俺おるが聞いてみる。貴方達おんだちや、ここにおって、誰だるか人の来たら教えまっせ。よかへ。(元

の所に戻り、下に向かつて) すんませんばってん、その黒か帽子ばとってみち下さらんか。帽子……しゃっぽう、しゃっぽう。

グランピエルの声 シャツポー? うい。せ、さ。フランセエ!

まき (驚いて) やっ。(二人の所にかへ戻り) フ、フ、フランス寺のばあてる様のごたる。

しの ほんなこつ?

くら ぱ、ぱ、ぱあてる様てか!

まき うん、そうらしかばい。御聖堂おみどうで見たお方のごたる。

しの そうか、ばってん、よう聞いて調べてみにやわからんぞ、よう。

くら いったい、何ばしに?

まき よかよか。俺がよう調べてみる。(また元の所に戻り) もうし、たしかに大浦のフランス寺でござりますとか。

グランピエルの声 たしかでござる。川に落ちて難儀をいたします。今にも押し流されそうにござる。たすけてください、ひき上げてください。

まき そら話によっては助けますばってん、おうちのその、首からお下げとるもんのことば、念のためにお聞きします。そらいったい、何ちゅうもんですか。

グランピエルの声 これ、くるすと申すものにて候。

まき ちょっとおかしませ。(腕をのばし、手にとってみて) 別嬪の母親が裸のこまか子供ば

膝に抱いて……可愛らしか子供たい。

グランピエルの声　（甘く囁くように）生まれたて、ほやほやのゼゼス・キリシト様。

まき　そして、おうちのもんですか。

グランピエルの声　ない。わたくしのものですよ。

まき　ただの飾りじゃなかですな。

グランピエルの声　ない。わたくしどもの守りの神でござる候。

まき　ふむ。おうちの名前は何と言わすのですか。

グランピエルの声　おうちの名前？　ああ、うい。グランピエル！（両手をかけて這い上がろうとする）

まき　（その頭を上からぐっと抑さえ）まあだお上がっちゃなりまっしえん。

グランピエルの声　おう！

まき　お名前が……ガランペエ……お生まれはフランスでござって、オランダじゃなかですな、出島におる。

グランピエルの声　ない、なかとです。

まき　黒船に乗って長崎においでしましたとか。

グランピエルの声　条約結ばれざりし前なれば、いくさ船、乗せられ先ず琉球、それより長崎に参りて候よ。

まき オランダは商ばひとり占めにして、ひどう日本の銀ば持っていく異端げなばい。

グランピエルの声 いかにも。そのいやなオランダではのうて、フランスでござる。プロオテスタンの宗旨ではござりませぬ。

まき おうちの国フランスと、ぱっぱ様の国ローマとは別でござりますか。

グランピエルの声 国は別でござれども、心は、心は同じでござる。

まき 誰だるの言いつけではるばるとおいでました。

グランピエルの声 ローマのぱっぱ様よりのお言いつけでおいでました。

まき そのぱっぱ様は、キリシト様の血筋であらるっとか。

グランピエルの声 いやいや、血筋ではござらねども、カトリカの親頭にあたらせられ、ピオ九

代目と申し上げ奉る。

まき ローマとは唐天竺のそのまた先の先と聞いとりますが。

グランピエルの声 な、な、な、浪路遙かに、あるときには暑熱烈しき砂原を越え、日数を数えれば何十何百日と申しまする。

まき ご苦勞のほどありがとうございます。

グランピエルの声 しからば。(と上がって来ようとする)

まき これから先も加勢のばあてる様がローマから来らるとですか。

グランピエルの声 いかにも。加勢に来られますれば、ご案じなさるに及びませぬ。また、フラ

ンス国よりの使者は將軍家に願ひ、切支丹を認むるよう計らうております。

まき そんならフランス寺はフランスが建てたのですか。

グランピエルの声 いやいや、それは即ち……

まき おうちが金ば出したのですか。

グランピエルの声 それこそゼゼスにて候。さすれば、ローマでござり奉る。

まき うむ。大分わかつた。

まき、また他の農婦たちの所に来て、何やら相談する。グランピエルは、首だけ出して、おとなしく待っている。たまりかねて、しのが今度は出て来る。まきもそれにつづき、グランピエルの首のまわりにしやがむ。くらだけはまだ用心深く残っている。

しの 念のためですけん、失礼は許してくれませ。おうちのお住居は、今、どこですか。

グランピエル 大浦、南山手、天主堂。(上手を指し)あの、立山たてやまで二十六人の聖人たちが丸血以留の血、お流しなされたにちなみまして、二十六聖人ゆかり堂と名をつけ申した聖堂みどでござる。

しの たしかにその寺のなかですな。出島じゃなかとですな。

グランピエル 南山手の石だたみの坂、登りますると、天主堂の門がござる。門を通過してなかに

入れば、目の前に高い石段がござって、屋根にくるすをかけし御聖堂おみどうそびえ、玄関にまりあ様のおん像が立ちおります。わたくしたちは、その石段の右の下、ぱあてる館やかたに寝起きしております。二階のてすりより港の有様やこの浦上の方角、よくわかる。とても景色でござる。まき ほんなこつ、あすこは眺めのよかところばい。

グランピエル (やさしく) あなた、その石だたみの坂を登られてか。

まき (あわてて) うんね、うんね。うちや行ったこたあ、ありまっしえんばってん、うちの知っとる人で、夜になって忍び込うだ人のあるとです。

グランピエル (喜んで) やあ、それは何という……

しの (また上から抑さえ) これでしみゃあじゃ。まことに失礼ながら、あのう……。その……  
グランピエル うい？

しの おうちには奥さんのあるとですか。

グランピエル (驚いて) くおあ！ いかなこと！ わたくしの？

まき 奥さんも一緒に、そのぱあてる館に住んどらすとですか。

グランピエル はは……おりない。わたくし、奥さん、おりない。

しの 子供衆は？

グランピエル 残念ながら、おりませぬ。(照れる)

まき (やにわに、グランピエルの十字架を手にとって押し戴く)

しの （それを奪い取るようにまきの手から取って同じく）

まき あのですなあ、あのう……ほら、ほんなこつでしよるか、あのう……

グランピエル うい……？

まき この世の科とがの救い主がですなあ……

しの やさあしか、やさしか目つきで、

まき 長か鬚ば、こう、顎から垂らして、

しの 白か、白か、真っ白の衣ば着て、

グランピエル ああ、白か、白か、真っ白の……

まき そして、

くら 黒船に乗って、

グランピエル 黒船に乗って、

しの につぼんに渡って来こらすときが来る、

まき 今こそ、そんなとき、

グランピエル 今こそ！

まき あら、ほんなこつでしよな……

しの そうでしよな……

グランピエル さなり。新しき世は今こそ開かれるでござろうぞ、皆様。

くら (叫ぶ) ありや、誰か来っぞ。助谷様ばい、権九郎ばい。

まき (あわてて、グランピエルの首を下に押しながら) 善か盆の日、夜の真夜中、「さん・くら」で待っとなります。よかですか。「さん・くらら」。

しの そんなときや、日本の着物ば着て、笠ばかぶっておいでませ。待っとなりますばい。

まき かくれとらんとあぶなか、ばあてる様、役人ばい、役人。

くら ほら来た。

三人、路傍の隅に小腰をかがめる。

鉄砲を肩に吊した助谷権九郎、五十歳、小柄で、福々しい顔。しかし、刀を差し、物々しい獵の服装、山鳩を三羽、腰にぶら下げて意気揚々とやって来る。三人の前をもったいぶって通り過ぎ、真中で、ゆっくりと振り返る。

助谷 そこにおらすとは、まきに、くらに、しのか。

三人 ない。

助谷 うむ。(傍白) ばばあばかりたい。三人、ここで今、何ばしとったか。……あん？ しゃがうで立小便ばしとったじゃろ、ははは。

まき うちのごと年寄りば辛抱できまっせんたい、庄屋様。

助谷 長崎の帰りか。

まき ない。

助谷 どげんじゃ、長崎の町は。もうすぐ盆の来るけん、景気もよかじゃろ。盆がすめば追いかけて八坂神社の祭たい。花も売りきれたる。

くら ない。精霊船の太かとは町々で作りよります。二十人くらいでかつがにやかつききれんごたる。

助谷 そうか。精霊船か。ちゃんこんちゃんこん、どーいどい、とな。はは……立派なもんじゃ。十万億土の仏様も喜ぶばい。

後の方で、そっと這い上がったグランピエル、脛の帯をほどき、腰に捲く。

神父の正装にかえたのだ。

助谷 うむ、そるで思いついた。(急に猫撫で声で)どげんじゃ、皆の衆、わったちも今年は精霊船ば作って出してみんか。

三人 (驚いて)へっ。(とグランピエルの姿が目に入り、更に驚いて思わずひれ伏して)へえい。

助谷 人の心の中までは知らんし、知ろうとも思わんばってん、それはそるとしてじゃ、わった

ちも俺おると同様、聖源寺の檀家じゃったな。な、そうじゃったな。

三人 ……

助谷 そうじゃろ。切支丹はおらんことになつとるとじゃけん、な、わかつとるな。

三人 ……

助谷 寛政の一番崩れから、安政の三番崩れまで崩れが出た。俺おるの代にあんげん面倒なことは起こしとうはなか。

まき よう心得とりますばい。

助谷 うむ。近頃、大浦にフランス寺が出来てたにはでけたばってん、あらあ、南蛮人専用のお寺。

日本人の寺じゃなかと。役人衆の目ばだまくらかして、そうつとお詣りする者のあると聞けばってん、よもやこのなかには、そぎゃん馬鹿者はおらんじゃろの。ああ、おらんはずじゃ。もしお上の目にもとまったら、早速ひつかまえられて、はりつけ、火炙り、逆吊し、

グランピエル 温泉岳うんぜんだけの熱湯漬だけけ。

助谷 や、何と、何と、お主は誰だるじゃ。(鉄砲を肩からはずす)何奴じゃ。

三人の農婦はこのすきに逃げ去る。

グランピエル そう言われるあなたはどなた。

助谷 お、お、俺おるか。(氣を鎮めて) 長崎奉行、片山伊豆守が代官、西役所、中次一平が下知、代々浦上の庄屋を相勤める助谷権九郎兼久とはわがことなり。

グランピエル おう、ぼんじゅうる。今日は、村長様。わたくし、大浦は二十六聖人ゆかり堂の司祭、グランピエル。(握手しようとする)

助谷 えい、下がれ、下がれ、ガランペエ。

グランピエル まずその兵器をお納め下され。わたくしはあなた様にお目通りして、ことのほかに嬉しくござる。

助谷 俺おるはあんま嬉しゅうはなかばい。

グランピエル はてうらかなる天氣にてありまする。

助谷 うら……うらうら？

グランピエル (懐から嗅ぎ煙草の革袋を出し) たば……たば……いかがです。フランスのたば。  
助谷 たばあ？ フランス？ フランスとはオランダの領地の名前じゃったな。

グランピエル (つまんで嗅いでみせる) こう……ふんふん……すうっ！

助谷 (好奇心にかられて近寄る)

グランピエル どうぞ。舶来。

助谷 (あわてて退り) ぶるるっ……きつとそら、人間の生肝ば乾して刻んだもんちがいなか。  
グランピエル ああ、このかぐわしき匂い！ ……ふんふん……すうっ！ 何と！ ……

助谷 それ、たばあ？

グランピエル うい。たば。たばこのことでござるよ。

助谷 鼻から吸うとかな、火もつけんで。

グランピエル ない。鼻から……どうぞ、舶来……よろしければ、これすべて献上いたしまする、

村長様。

助谷 俺に、皆。

グランピエル ない、皆、すべて。

助谷 (機嫌よく) はは……そるじゃ一つ……(つまんで怖る怖る嗅いでみる)

グランピエル いかが。

助谷 ふむふむ……ああ……少し、こそばいかな。すうっ！

グランピエル さ、これ、すべて。(袋を助谷に渡す)

助谷 (あたりをうかがい、神父を隅の方に引っぱって行き、囁く) 誰だるにも言うちやいかんです

ぞ、よかですか。

グランピエル このくるすにかけまして。

助谷 いったいあなた方は坊さんのくせに、そんげん煙草のごたるものば吞うでもよかたですか。

グランピエル よかたにて候。

助谷 酒は？ 酒。

グランピエル 葡萄酒を少しばかり。

助谷 へえ！ 酒もですか。へえ！ 俗人と変わらんじやなかですか。

グランピエル (にこにこ) わたくし、あたり前の人間性の上に立ちおりまする。

助谷 へへ…… (小指を出して) そんなら、こるは？ な？

グランピエル (真似をして同じく小指を出す)？

助谷 へへ…… (神父の脇腹を突つつく)

グランピエル おっ！ じゅ、ぬ、こんぷらん……

助谷 えっと知らん振りしますな。誰にも言わんけん教えまっせ。丸山によか女子のおらすとじやろ。おいらんが……げいしやが。

グランピエル まるやま……げいしや？

助谷 隅におけんぞ。手も早かとじやろ、長かし。

グランピエル (あわてて指をひっこめて) 豚奴すこしよん！ (つかみかかろうとするが気がついてやめる)

助谷 そうまで嬉しがらんちゃよか。好きでしよ。かくしますな。

グランピエル (誇張して) おう、女！ 女！ 女！ 見目形みめうるわしけれど、なよなよと風にも耐えぬ風情なれど、だまくらかしの名人で、こけっと、見栄坊、わからず屋……

O femme! Femme! Femme! créature faibleet décevantel! …… nul animal créé ne peut manquer

à son instinct: le tien est-il doncde tromper? ……

いったい貴様の本能は、男をだますということか！　ああ！（懊悩の態）

助谷　（心配して）どうしたと？　へ？　どうしたと？

グランピエル　（元にかえり）こめでい・ふらんせえず！

助谷　あ？　さては若かとき、娘っ子に振られたこともあつとですな、フランスで。

グランピエル　（十字をきり）さんたまりあよ！　たとえ芝居にことよせたりとも、御身とひと

しくめぐみ深く、やさしく、うるわしき女人を呪いし罪をお許しあれ。この報いには、今宵、

縄責じしぶりな三百の行を行ないまする、あめん！（助谷に）わたくしどもは色身の快樂を絶ち、ひたす

らにアニマ、魂のたすかりをのみ求めまする。わたくし、ひとりのますらおとして一生、娶めとらざることをこの上もなき仕合と存じ候。

助谷　お気の毒にな。そげん恐れ入らんでんよかですよ。日本でん、お釈迦様の教えに従いながら、大黒ば二人も三人もかこうとる者、金貸しばする者もおる。裏に回ったらどげんことばしとるかわかったもんじゃなかない。やかましゅう言おうとは思わんけん安心しまっせ。ところで、その、ことのついでに無心の少しあるとばってん……

グランピエル　何なりとおおせられい。

助谷　俺はまだ葡萄酒の酒ばのうだことのなか。すまんばってん、ついでするとき……な。

グランピエル　心得た。白でござるか、赤でござるか。

助谷　へ？　ええと（何のことかよくわからないが）……赤がよかです。いや、白かもしれん。

いや赤がよかかな、いや……

グランピエル　しからは村長様、両方を持って参じまする。

助谷　へへ……

グランピエル　名誉と尊敬と喜びとを以って献上いたしまするが、ところで、わたくしの至極さ  
さやかな、とるに足らぬ願いにも耳傾けて下さらぬか。わたくし、実は……

助谷　切支丹以外のことなら、（人の気配を感じて、急に威厳をとりつくろい）ああいや、ちと  
おうちに文句がござる。

グランピエル　実は、わたくしが本日……

助谷　（小さく）えっとそう近寄りませぬ……抗議の文句があるとす。

グランピエル　おう、抗議。

助谷　抑々、おうちの身うちが大浦の高かところにフランス寺ばおっ立ててから、長崎の町は騒  
ぎでござる。切支丹邪宗門堅く禁制のことご存じなとか。

グランピエル　邪宗門ではござりませぬ。正し宗教にござって、世界の国々、文明の国々ならば  
いずこにても国の法律の認むるもの。邪宗門とは心得ませぬ、邪宗門とは。

助谷　まあまあ、そうむきになりますな。おうちと議論しようとは思わん。いったい、おうちは  
ひどう日本語が達者ばってん、どこで覚えられたとな。

グランピエル　この初めは ロドリゲス Rodriguez の日本文典。また実際にては、わたくし、ヨコアマに

上陸する前琉球にて待っておられる、ノン、待っておるときに習い、通商条約結ばれてより、ヨコアマに上陸許されてまた習い、この長崎に参りてより長崎のお方からも習うてござる。

助谷 長崎の人間から？

グランピエル ない。わたくし江戸町の語学校にて、日本の青年にフランス語教えます。その日本の方から日本語覚えます。どげんじゃ、村長様、ああたも、フランス語ば覚えまっしえ。

助谷 待った、待った。そう馴れ馴れしゅうしますなちゅうに。

少し前から、そでとなみを除き、初めに出て来た男と女たちが左右から現われて、そっと耳をすましている。

助谷 えへん。いやしくも俺は庄屋じゃ。一応の吟味はいたす。さても、こんげん近かところて南蛮紅毛の人間ば見るとは初めてばい。聞きしにまさる天狗の鼻、青う気味悪光る目ん玉、鬚もじやのももんじい。さだめし胸毛も、もさもさと生えとるとじやろ。四足ば食べ、葡萄の酒ば呑むちゆう毛唐、傍に寄れば、いやらしゆう臭かばい。…さて（相手を見上げ見下ろして、にやりと笑い、からかい気味に）その首からぶら下がって、まんやかに人形の彫ってあるとは何というものでござるかな。

グランピエル これでござるか。これこそ切支丹のしるし、たっときくるす。

まわりの連中から「はあっ」と嘆息の如き気配する。

助谷 (その方をじろりと見て) そのゆえは。

グランピエル われらが御ん主、ぜぜす・きりしと、ときにおん年三十三歳、われわれが科とがをたすけんため、くるすにかけられ、われらを自由になしたまえばなり、このくるすのご功力により悪魔退散いたし申す。

助谷 (傍白) おのれが悪魔天狗を忘れ、怪しきくるすの術ば自惚れおる。その切支丹が真っ昼間怖れ気もなくのこのこと、俺が差配の土地ぼうろつくとは合点が行かんばい。もう一押し聞いてみるとすつか。さてさて、いったいぜんたい何ばしに、わざわざこの浦上にまでおいでました。

グランピエル (つまって) うーむ。それは……その……

助谷 何ばしに、え？

グランピエル さ、さ、散歩。散歩にて候。

助谷 さ、さんぽ？ ……さんぽ。日本語で言いませ。

グランピエル ブロムナード、散歩でござる。

助谷 その、さ、さ、さんぽとは何ばするとですか。

グランピエル りやん、何もいたしませぬ。りやん！

助谷 何もせんちゆうことはなかでしよ。怪しかばい。

グランピエル ノンノン。ただ、このよう、歩くのでござる。(歩きまわる) 目的も理由もござりませぬ。肉体の健康すこやかのためでござる。

助谷 ふむ。そんならばですな、大浦からここまでざつと二里。身体のためならば、そらちと過ぎますばい。何か魂胆のなけらにや、こんげん大散歩は出来てんたい。やっぱ怪しか。

グランピエル 大浦の坂を下り、阿茶さんの居留地を抜け、大波止の大砲丸だまを左に見て、葦しげる道を川沿いに、ふらふらとここまで来てござる。(急に) ああ、うい！ 浦上には名の高い植木屋殿おらるるはず。何でも鳥や獣の腹綿をとり去り、皮を縫い、再び元の姿になし戻す術、ドクトル・シイボルトより伝授ありしとか。

助谷 ははあ、辰之助んことか。

グランピエル その植木屋を探しております。そのお方のお住居はいずれか、お教え下され、村長様。

助谷 まあ待ちまっせ。そう行きたかどけ、かってに行かれちやなりまっしえん。

グランピエル はて、心得ぬ。

助谷 近頃、アメリカ、エゲリス、フランスなど、大砲つんだ黒船で脅しにかかったれば、とうわが日本国の土の上にも、おうちたちが住んでもよかちゆう取りきめがでけた。でけたにはでけたばってん、そら、切支丹ば日本人に弘めさすつがためではなかとです。よかですか。

ですけん、おうちのごと異国の者は、その屋敷から一步も外へ出てはならんとです。

グランピエル さあれ村長様。ハリス殿との間に結ばれし条約、その文言をご存じか。

助谷 し、し、知つとるばい、そのくらい。

グランピエル なら、このような箇条のあることご存じのはず。

助谷 う？

グランピエル それぞれの開港場にては十里四方、異国の者、散歩自由たるべし。ああ、散歩！

(歩きまわる) 散歩！ ……散歩！

助谷 (負けていず)さんぽさんぽうか！ そう言うて長崎の町ば触れ歩いてみませ。南蛮渡

来の珍しか魚が来たちゆうて、ははあ、高う売れることじゃいろ。はは、さんぽさんぽう！

くすくす笑う者がある。少し前から後の方でのぞいていた辰之助である。無精鬚を生やし、ただ一人着流しである。

グランピエル そのうち、村長様のお膳の上に、その魚、上がりましようぞ。

助谷 はは……たばこはもろとくばってん、魚はいやじゃ。庄屋の下知でござる。以後、浦上の立ち入りは相成りまっしえん。ご用ならば(意味あり気に)ご用ならば、じきじき、庄屋敷にござれ。な。

グランピエル なれども条約にて許されてござる、自由でござる。

助谷 これ、わからんことば言うお方じゃ。大体、日本の一里とはフランスの一里とはちごうて一町のこと。さすれば十町四方となる。まず大波止のところまででござる。あの太か大砲の丸たまでん見物したら、さっさと寺へ引き上げたらよか。

グランピエル 一里はあくまで一里でござる。

助谷 まわりじゅう、村の者が見とりますたい。そんげん声ば荒立てんでよかでしよ、へへ……

グランピエル、村人たちを見まわすが、皆は知らぬ顔である。

助谷 ねえ、フランス寺のお住持さま。あの太波止の大砲たまん丸、二かかえもある太か大砲たまん丸は、

海坊主の頭ほどある丸は、何の大砲たまん丸かご存じか。

グランピエル ……

助谷 知らんなら教えまっしよ。えへん。頃は寛永十四年、あの島原にたてこもり、天草四郎以下切支丹の奴ばら、邪法を用いて立ち抗むかい、城いっかな落ちざれば、遂にオランダ船を有明の海に回し、海より大砲を撃ってはなす。天守閣にありし四郎ために傷つき、大将の威信地に落ちたり。そんなときの大砲のたまが、大波止に飾ってあるたまじゃ。

弥吉 うんねうんね。あら片山伊豆守様が作らして、島原まで持って行かしたとばってん、太過

ぎて使われんじやったもんですたい。

一同 (小声ながら) そうたい、そうたい。

助谷 だ、だ、だまっとれ。余計な口出すな。あれはオランダのたまじゃ。よかか皆の者、キリシトの生まれ替わり、万事かのうて不死身とまで崇めまつった天草四郎も、ただの人間にござった。異国の神や仏などというものは、そんげんふうにあてにならんもんたい。(神父に) 切支丹が切支丹に矢ば向ける。おうちはこるばどう思わるるですか。情なかことですなあ。

グランピエル いやいや村長様、オランダはプロオテスタンにござって、切支丹……

助谷 切支丹にプロオテスタン、どっちもたんのついとるたい。

辰之助 (面白そうに無遠慮に笑う)

作右衛門 辰之助。

辰之助 へい。すみません。

グランピエル プロオテスタン共こそ野蛮人にござって、定まりたる儀式もいたさず、好きかってに女をめとり子を生子、平気で福音とかを祈りおる。プロオテスタンのなすことは、われらわれら切支丹のいっこうに存ぜぬところ、皆様、村長様は痛く誤解をなされて候ぞ。

まき オランダの坊<sup>ぼ</sup>さんは、奥さんば持つとげな。

辰之助 ひらけとつたい。

くら だらしのなか。

助谷 ええい、フランスじゃろうとオランダじゃろうと、毛唐の坊主とかかり合うてはならん。さて皆に申しつくることがある。浦上の檀那寺 聖源寺本堂の大屋根が、この間の梅雨の長雨で崩れ落ちた。今のうちに修繕せにや腐って崩るるばかりじゃ。そこで和尚と相談して檀家一同から何分の喜捨を受くることにしたぞ。

一同動揺する。

助谷 日本国民として、また將軍様のおめぐみで安樂に渡世なす百姓なら、先祖代々、浄土宗の門徒なら……

作右衛門 恐れながら庄屋様。ああたも浦上に長う住んで、おったちのことはよう知つとらすとに、今になって急にそんげん無法な……

助谷 なにが無法か。当たり前のことばい。

忠次郎 お上のご用なら何なりとも身を粉にしてもするとばってん、

弥吉 宗旨のことだけは、

助谷 宗旨のことだけは？

辰之助 嚴重やかましかぞ。

弥吉 だまっとれ。

作右衛門 今までおうちは、見て見ぬ振りばしてくれたじゃなかですか。

助谷 な、な、なんじゃ。この権九郎が、わったちの味方じゃと。なんば言うか。けしからん。  
聖源寺本堂寄進のこと、きっと申しつけたぞ。

農夫甲 かしこまりました。

農夫乙 きっといたしましたす。

辰之助 おるは、どっちもしとうなか、切支丹も仏様も。

助谷 ほほう。次は、このたびの盆供養には、長崎の町の者にもひけばとらんほど太か精霊船ば作って、大波止までかつぎ出せ。浦上にはご禁制の切支丹はおらんことば町の者に見せつくつとさ。賑やかに、仏様ば（グランピエルを横目に見て）送るのじゃ。チャンコンチャンコンとな。はは……チャンコンチャンコンドーイ、はは……辰之助、わらも行くか。チャンコン、ドーイドイ……（上機嫌で囃しながら上手へ去る）

グランピエル 村長様……村長様……たばをお返し下され……お返し下され。（その後を追う）

皆はこそこそ相談し合う。

辰之助 誰だるが日本の寺のためになぞ金ば出すもんか、なあ……なあ……なあ。（まわりの人々に悪戯らしく聞いてまわり、作右衛門の番になる）

作右衛門 これ、わら、いったい、この一月、家んなかにとじこもって何ぼしとったとか。

辰之助 へへ……死に殻ば、世界で一番の死に殻ば作っとりました。

忠次郎 なんの毛物か。

辰之助 へへ……毛物、とはちとちがう。日本人にはそのきれかとかわからんというもんばい。

(次の人に)おうちもそうじゃろ。フランス寺のためになら、嫁さん質に入れてでん金ば出す、な、そうじゃろ。

まき その嫁さんに死なれたお前や、何ば質に出すとか。

辰之助 はは、こら、まいった、はは……。(陽の目を見て、ふらふらとする)ああ! ……(農夫

甲に)おい、盆の来たら、今年や俺も精霊船ば手伝うぞ。

農夫甲 よか、手伝え。

農夫乙 さては、おうちは……

辰之助 はは……(丘の方を見て)あの丘の向こうか! 今に見とれ。

忠次郎 わら、何がそげんに面白かとか。

辰之助 悪かったな、わったちの神妙に困つとらす顔ば見とつたら、善か人どもの畏った顔ば見とつたら、おかしゆうて、おかしゆうてたまらんごとなったとき。

弥吉 何じゃと。そるが信者としての言葉か。わつとはもう口もきかんぞ。

辰之助 あ、弥吉さん、久し振りばい。おなみさんはどうしとる。

弥吉 どうもしとらん。

辰之助 わら、ほんなこつ善か者ばい。まじめで、働きもんで……似合いの夫婦ばい。

弥吉 そんなら、なして、おなみさんばたらしこもうとすつとか。

辰之助 冗談言うな。俺はなんもせん、なんも。

弥吉 貴様っ。(詰めよる)

作右衛門 (弥吉を制して) ま、ま。(辰之助に) お前や、家んなかばつかとじこもつとったけん、ちつとばかし頭がおかしかとじゃろ。(一同に) こいつの言うことは、あんま気にかけんがよか。さ、帰ろ、帰ろ。

辰之助 やい待て……

たばこの袋を手にして、グランピエルが戻って来る。交渉は腕づくであったようで、お尻や膝に白い泥がついている。

辰之助 あ、ちようどよかところに戻って来<sup>こ</sup>らした。さて、皆……俺は今日から切支丹ばやめた。

切支丹ば転んだぞ。

一同 やあ!

一同、辰之助に詰めよる。

辰之助 生まれるとすぐ、ばうちぞもの水ば授かって信者にされた。何のためにそうされるかもわからず、ただ先祖代々そうしとるからちゆうだけで、親の言いなりに切支丹にされた。ばつてん、よう考えてみつと、おかしかことだらけたい。俺はもうちつと考えてみたか。じゃけん、切支丹はやむつとじゃ。俺はもう浦上がいやになった！

作右衛門 考えちゃならん、考えちゃ。考ゆることば越したその上に切支丹はあるとじゃ。  
忠次郎 考ゆつことが異端、ぜんちよの始まりばい。

辰之助 異端で結構たい。俺の欲しかもんはぜぜすじゃなか。もつと、もつと別のもんのごたる  
気のしてきたとばい。

グランピエル ぜぜす様ではおらない。としたら、何でござる。

辰之助 神が創り出すもんじゃなかと。人間が、自分の力で創り出すもんのことばい。

グランピエル おう！ それこそ、でもん操るところの言葉、重きモルタル科とがの言葉にて候ぞ。

辰之助 重き、モルタル……

しの 青瓢箪の気味の悪か面ばして。

くら いんへるのから出て来たもんのごたる。

しの わけのわからんことば口走って。

まき 地獄に落ちてもかんまんとか。

辰之助 ああ、かんまん。自分の力で何か出来さいしたら、何と言われてもよか。

くら 耳の汚ればい。さ、こんげん悪か者にかんまんと、帰ろ、帰ろ。

辰之助 ああ悪か者ばい、俺あ。その通りばい。早よ行け。さっさとはってけ。そのうち皆ばひ  
つつかまえて、逆さはりつけにしてくるっけん。そるとも皮剥いで、なめしてやるか、はは：

：

しの おう、まるちいるで死んだなら、

くら ばらいその天に参る。

グランピエル (大いに喜ぶ) や、や、や… (急に不安になり) おう、もし、皆様、皆様…

弥吉 この世の苦しみも死後の安楽に比ぶれば物の数でもないわ。

辰之助 へへ、威張つとるばい。

忠次郎 気が狂うたか辰之助。可哀そうに！ わらのご先祖、がすば様が泣いてござるぞ。

辰之助 ふーん、泣き声でん聞こゆつとか。がすば様の削りば、死にかけとるおなみのおっ母さん  
にのませてみませ。へん、きくもんか。

作右衛門 信心の薄かったらきかん、きかん。

辰之助 日本が今どうなつとるか、ちったあ考えませ。ご先祖様がご先祖様がちゆうて、すまし  
ちやおられんけん。

まき  
くら } 裏切もん、卑怯もん。死ぬことがおとろしゅうなつたとばい。

しの そうたい。男のくせに。

辰之助 男よりも人間になりたか。おら、人間になりたか。

グランピエル (一同に) これこれ。庄屋に聞こえたら何となさる。おしずかに、おしずかに。作右衛門 うんね、うんね、ぱあてる様。おつたちはとるに足らん水呑み百姓ではありますばつ

てん、ぜぜす様のおんもとでは、上もなか下もなか、平等の人間。死んでばらいそに参つたら、ぜぜす様のお膝下に並んで坐らるつとです。真の人間は魂ば信じとる善か人間。善か人間はなごつとも恐れまっしえん。もしお上がおつたちばつかまえに来たら、喜んで連れて行かれまっしよ。……さん・くらら！

一同、それにならつて「さん・くらら」と合言葉のように言い合いながら、静かに去る。  
農夫甲、乙、喜んで辰之助の肩を叩く。

農夫甲 辰之助さん、でかした、よう言うたな。

農夫乙 おら、胸のすうつとしたばい。

農夫甲 今夜は部落に來い。呑もう。

辰之助 (その手を邪険に払い) あれじゃけん切支丹は虫が好かん。何かていうと、まるちいる、まるちいる、ぱらいそ……後生のたすかり……死ぬことば何とも思つたらん。いったい、この自分ちゆうもんは、わったちの命のなかにはなかつたか……

グランピエル 辰之助殿……

辰之助 そるが善か人間か。そるが真の人間か。うんね、ちがう、ちがう。人間は自由たい。人間の命のなかには善かことの外に何かがある。何か……やい鍾馗坊主!

グランピエル (恭々しく) じゅすいびやん、るぐれたあぶる……

辰之助 いまにこの浦上がまるちいるの血で赤うに染まったら、そんなときや、皆、お前のせいじやぞ。

グランピエル もしそれが天主の思召しなら、わたくしの祈りの足らざるゆえなれば、喜んでこの色身を捧げます。

辰之助 ええ、またしても天主か。(農夫たちに) おい、わったちに内密の相談あるとばい。金は望み通り出す。

農夫 よか、なんでん聞く。

辰之助 うむ、呑もう、来いっ。(走り去る)

農夫甲乙、つづく。

グランピエルもそれを見送り、丘の方を向いて両手を合わす。  
遠くで「あんしやまあ……あんしやまあ……」とそでの探し回る声。

グランピエル 浦上のつらなる丘、情<sup>なさけ</sup>あらば、二百年の沈黙<sup>しじま</sup>のなかより、より高き命の音<sup>ね</sup>をこそ  
噴き上げて聞かせたまえ！ ……より高き命の音をこそ！

そでの「あんしやまあ……あんしやまあ……」の声。

——暗くなる——

## 第一幕

### 第二場

先の場のつづき。暗くなったかと思うとすぐ、ほんのり明るくなる。ただし背景の奥の方だけで、三つの丘が影絵となって浮かぶ。前景には誰もいない。  
蛙が鳴いている。  
丘たちが身じろぎして、もくもくと動く。

右の丘 (あくびをする) あ、あ、あ!

中の丘 しーっ。

左の丘 しーっ。

中の丘 では…… (手に一冊の本を持っている) どうすばあてる・われわれんたまい、

右の丘 どうすばあてる・われわれんたまい、

左の丘 どうすばあてる・われわれんたまい、

中の丘 どうすひいりよ、われわれんたまい、

右の丘 どうすひいりよ、われわれんたまい、

左の丘 どうすひいりよ、われわれんたまい、

中の丘 どうすよっぺりとさんち、

右の丘 どうすよっぺりとさんち、

左の丘 どうすよっぺりとさんち、

中の丘 われわれんたまい。

右の丘 われわれんたまい。

左の丘 われわれんたまい。

中の丘 ばあてるのうすてる。よかかな……ばあてるのうすてる。天にましますわいらがおのや、

みなもたちとまれえ、みをきたりたもう、

右の丘 } みなもたちとまれえ、みをきたりたもう、

左の丘 }

中の丘 天においてもおぼしめしままなるごおく、地においてもあらせたもう、

右の丘 } おぼしめしままなるごおく、地においてもあらせたもう、

左の丘 }

中の丘 わいらが日々のおんやしないを今日わいらにあたいたもう、わいらが人にゆるし申すご

と、

右の丘 } わいらが人にゆるし申すごと、

左の丘 }

中の丘 わいらがとがを放したもう、わいらをてんとうさんに放し申すことなければ、わいらは

きょうあくをのがさせたもうたまいや、あんめんぜぜす。

右の丘 } わいらをてんとうさんに放し申すことなければ、わいらはきょうあくをのがさせたも

左の丘 } うたまいや、あんめんぜぜす。

中の丘 哀かなしくおとろしく苦しか日々を、わいらは百年も二百年も過あぎして来た、ばってん、

右の丘 待ちに待った日の、どうやら、

左の丘 近うなったごたるばい。まるちいるの日は。

中の丘 その日の来<sup>く</sup>つとばたのしみに、また今夜も、つとめば励みまっしよ、カテキズモば。

右の丘 つとめまっしよ。

左の丘 はげみまっしよ。

中の丘 (本の頁を繰りながら)今夜は……第六番の御ん掟の次。罪科つみとがの源いずみなる七つの科のこと。  
ここたい。

右の丘 ない。

中の丘 されば、その七つの科ば語りなされまっせ。

右の丘 ええ、高慢に、貪欲に、邪淫に……せいから、

中の丘 嫉妬

右の丘 あ、嫉妬……せいから、忿怒う……う……

中の丘 貪食どんじき。

右の丘 貧食。こるで六つ。しみやあはと……懈怠まよにて候。

中の丘 ようでけました。高慢の科というは如何ん。語りなされまっせ。

左の丘 高慢の科というは、自らを万に超えて勝まさりたりとなし、理性を忘れ、猥りに思えば発することに候。

中の丘 ない。その高慢の科に立ち向こう善はいずれぞや。

左の丘 即ち、高慢に向こうウミルダアデ。

右の丘 そうたい。

左の丘 ウミルダアデとて、へり下ることなり。

中の丘 まことにようでけました。今夜はこるだけ。

右の丘 }  
左の丘 } ごくろうに存じまっす。

中の丘 さらば、サルベレジナのおらっしよ……あわれみのおんはは、こうびにてましますおん  
みにおんれをなし奉りて、わいらが一命かんめいたのみをかけ奉りて、ろれんとなるようなえ  
いわな、このみにしゃけびをなし奉りて、この涙の谷にうめきなきして、おみいにねぎやいを  
かけ奉りて、これによつてわれらがおんとりなしの、あわれみのおんまなこを……

## 第二幕

サン・クララ堂の跡。

雑草の茂る空地。まわりにささくれた立木が六七本。土台石かと思われる石が点々とし、何に使ったのか、大きく平たい踏み石が一つ。

星のない夜。

うずくまった人影がある。印絆纏に股引姿のグランピエル、作右衛門、忠次郎、弥吉、まき、くら、しのである。……近くを精霊船が通っているので身を潜めているのである。「チャンコン、チャンコン、ドーイドイ」と囁し、鉦を叩く多勢の群れ。それが遠ざかるにつれて頭をもち上げる。

作右衛門 何ばい出たじゃるか。

弥吉 三ばい。

忠次郎 辰之助が鉦叩いて音頭とって……

まき 由松の奴も権九郎にごますって、とうとう船ば出した。

しの おったちも昔なら、出したかもしれんなあ。

くら ぜぜす様ば裏切って、天竺の仏ばまつるごたることは、なんちゆうてもようなか。ご先祖

様にすまん、すまん。

作右衛門　そうたい、ご先祖様にの。

忠次郎　辰之助がなんして転んだか何としてもわからん。

まき　大方、新式の兵隊にでんなりたかどじやろ。長か股引に靴ばはいた。

しの　うんね、シイボルトやオランダ人と仲ようになったけんたい。このごろ、オランダ人がよう遊びに来とらす。

弥吉　おるは、あいつの面ば思いつきりやってみたか。

まき　転んだことば得意になって、しゃあしゃあとしとる、憎らしか。

グランピエル　なれども、人を憎むことはなりません。その人の力足らざるは、とりもなおさず、わたくしたちの力足らざるしるしなりとして、（蚊を叩く）己を責むるばかりに候え。

弥吉　すみません。

まき　ばってん、ばあてる様。あんげん悪かもんはもうおりまっしえん。おったちのごと、精霊船も出さず、聖源寺の寄進も断わり、なみのおふくろのごと、死人が出ても届けもせず、切支丹のしきたりで葬とむらひば出すものもおつとですよ。

グランピエル　おう、その勇氣と賢き信仰！　わたくし何と申し上げてよろしいやら、言葉に苦しみます。なれど……

弥吉　もとより覚悟はしとりますけん、ご案じされますな、ばあてる様。

作右衛門 権九郎奴、次にどげん手に出るかわかりましえんばってん、昔は知らず、われらのためにローマからはるばるとおいでなされたああた様は目の前に見たら、も早なんごつも恐れまっしえん。

くら 長崎の町では、切支丹ばつかまえて、皆首ば斬れちゅう者もおるとです。そるば聞いて、うちや、ぞくぞく嬉しゅうなつたとですよ。

まき こないだは嘘ば言うてすんませんでした。うちや見物人と一しよに大浦のお寺にまぎれ込もうで、よそながらおうちのお姿ばみかけたことのおつとですよ。

グランピエル よう参られたと申し上げとうござれども、役人どもの見張りはいっそうきびしきかなければ、そのように危いことはおやめなされ。時節を待つが肝要にて候。

まき ない。

しの ばあてる様だけが心頼みでござす。

作右衛門 ばあてる様、では、つづきを。

グランピエル 先程より重々承って、皆様のしきたり、日繰り、戒律、おらしよの唱え、大方カトリカの道にかない、正しく守られてこれありと存じ候。

一同 はあっ！

グランピエル パウ口殿、水方みずかたはそなたでござったな。

忠次郎 ない。

グランピエル 水方の経文の唱えを申されよ。

忠次郎 初めにその人の名前ば言います。ジョアンなり、マリアなり、ガラシヤなり。

グランピエル うい…：

忠次郎 次に、こう唱えまっす。エゴオ・バウチゾモ・インノミネパアチリ・エツ・ヒイリ・エツ・ピリトサンチ・アメン。

グランピエル 文言、少し抜けます。ピリトにては非ず、スピリット。もし言いがたければ、日本語にても苦しからず。

まき ああ、日本語でんよかですか。

グランピエル さなり、たとうれば、「いかにパウロ。パアテルとヒイリヨと、スピリッツサンの御名をもて、それがし汝を洗い奉る」

忠次郎 長うなりますな。パアテルと、ヒイリヨとスピ…：やっぱ、ローマの言葉がよかごたる。

(笑う)

雨が少し落ちて来る。

くら 雨ばい。

しの 雨のふって来た。

弥吉 大したことなか。

まき 精霊船はわやたい。ちようどよか。

グランピエル してそのとき、いかがなされます。ことごとく唱え候や。一語も欠くるものなきや。

忠次郎 ない。文句の半分ば言うてから、水を額にかけ始めまっす。

グランピエル ノンノン。水をかくるとともに唱えずば、ばうちぞもを授けたるにてはあるべからず。

忠次郎 そんなら、初めから一緒にかくつとですな。

グランピエル ない。

しの 水の容れ物は、普通のご飯茶碗ば使うとりますばってん、よかとでしよか。

グランピエル 汚れなき器にてさえあれば苦しからず。

弥吉 あのう、ばうちぞもば受けずに死んだ人間はたすからんとでしよか。

グランピエル おしなべてアニマ、魂のたすかりを受くるためには、この授けなくしてかなわざる道ではござれども、もしかかわずして死する人のために。

弥吉 なみのおっ母さんがそうですね。

グランピエル そのために、おん主ゼゼスより、ふた様のばうちぞもを定めおきたもうなり。一つには、

弥吉 一つには？

グランピエル 一つにはのぞみのばうちぞも……

しの もし、

くら 誰か、人の来る。

一同、はっとして身構える。

ひそかにではあるが、あわただしくなみがかけてつける。寝まき姿。

なみ 皆さん、お逃げまっせ。すぐお逃げまっせ。

作右衛門 どうしたとか。

なみ 役人が部落の勢せいばひきつれて踏み込こんで来たこと。

一同 えっ！

弥吉 やっぱ来たか。

なみ 皆さんの家にも行いつとる案配あんばいばい。

くら どうしゆう。うちや乳呑児ちちごが寝ねとるとに。

しの おら、おめだいは抽ひき出しに入いれたまんま。

弥吉 おら、このまま召よし捕とられとうなか。なみ、一緒いっしょに逃にぐう。外海そとめに行いこう。

なみ ああ！（へたへたとへたりこむ）どげんしたらよかか……

忠次郎 （祈る）でうすばあてるわれわれんたまい、でうすひいりよわれわれんたまい、でうす

よっぺりとさんちわれわれんたまい……

くら おら、家に帰ってみる。（飛びだす）

作右衛門 うろたえるでなか、うろたえるで。こうなるとはかねてからの覚悟じゃなかとか。

しの ばあてる様ば、ばあてる様ば……

忠次郎 そうじゃ、ばあてる様ば逃がさにゃ、ばあてる様ば。

まき 早う笠ばかぶりませ。

作右衛門 金比羅山から西山へ回ったらよか。誰かお連れ申せ。誰か。だる

弥吉 なみ、なみ、おると逃ぐう、逃ぐう。

なみ いやあ、いやあ。

弥吉 おると一緒に黒崎に行こ。あすこなら切支丹でん安楽ばい。

作右衛門 誰か、誰か……足腰の達者か者がよかばってん……

弥吉 さ、とかまったらしみゃあばい。

なみ うちやここにおつと、ここにおつと。死んでんよかと。

弥吉 やっぱお前は辰之助に惚れとつとじゃな。

「あすこばい、あすこばい。サン・クララばい」と叫ぶ声が近くでする。助谷権九郎である。一同ぎよつとして、その方を見ると同時に、鉢巻をし、六尺棒を持った捕手が五人、ばらばらと一同をとりまく。中の二人は農夫甲と乙である。

捕手　ご用だあ。

作右衛門　じたばたしてもしよんなか。(坐って畏る)

一同、それにならう。

権九郎、悠然と現われる。

前場と同様の服装。陣笠をかぶる。

助谷　ほほう。皆の衆、お揃いか。手間がはぶけてちようどよかばい。はは……聖源寺の寄進は断わり、精霊船は出さず、亡者の葬をほしいままになしたるは、これご禁制の切支丹なり。よって召し捕る。それ、縄打てえ。

作右衛門　待った、待った。

助谷　作右衛門か。何ば待つとか。

作右衛門　神妙にするけん。縄かくることはかんべんしてくれまっせ。

助谷 ならん。切支丹に慈悲は無用じゃ。

作右衛門 行けと言うところに行く。逃げもかくれもせん。じゃけん、縄かけんでよかじゃなかか。

助谷 その手はくわんたい。雨の闇夜を幸いに、途中で逃げよう算段じゃ。大雨にならんうち、それっ。

捕手、縄をかけようとする。

グランピエル、突如として立ち上がり、そのうちの一人を突きとばし、次の一人を締め上げる。弥吉は、ここぞとばかり、なみを抱えるようにして逃げだそうとするが、なみは「おうちは好かんと」と叫び突きのけて駆け去る。

弥吉、しばし茫然とするが「おなみさん」と後を追う。「おなみさあん……」くら、しのも姿を消す。

助谷 何者じゃ。(うろたえながら)逃げたもんば追え、追え。こやつをつかまえろ。手向いするとは……

捕手の三人はそれぞれ後を追ひ、残りの二人がグランピエルにかかる。

グランピエルは締め上げた捕手の棒を取りあげているので、それで二人をあしらう。呼び子の笛の音が聞こえる。

作右衛門、忠次郎、まきはそのまわりをうろうろしながら、「おったちばしばれ、おったちばしばれ」と絶叫する。

荒れ狂うグランピエルは遂に二人の捕手を叩き伏せ、権九郎を見据える。

助谷 (震えながら) やい、そ、そ、その饅頭笠ばとれ……とらんか。うぬっ……手向かいする

奴は……(刀を抜く) 叩き斬るぞ。

驚いたまわりの三人は「お逃げまっせ、お逃げまっせ」と叫びながら姿を消す。あちらこちらで呼び子の笛の音がしている。

助谷 見馴れん奴じゃ……暗かけん、面がよう見えん。助谷権九郎兼久ば知らんか、竹光じゃなかとぞ、この刀は……人ちがいすな、こりゃ……召捕りはお上の言いつけじゃ。切支丹は非国民じゃけん、召し捕るんじゃ。斬るっとぞ、この刀は……斬れて血が出ても知らんぞ。やっ

……

刀と棒と渡り合う。

ついに棒が刀を打ち落とし、棒は権九郎の脳天から振り落ちる。

権九郎は「きゅう」とひっくり返る。

グランピエル　（あたりをすかしながら）ぼうろ殿……かたりな殿……

闇のなかから、頭巾をかぶったそでが飛び出す。

グランピエル　どなた……てくら殿か。

そで　うんね、まりあ・そで。

グランピエル　まりあ殿！　何ゆえに、これに？

そで　（グランピエルの腕をつかみ）なんも言わんで、こうおいでませ。（腕ずくで曳いて行く）おいでませ。

雨のなかに呼び子の笛しきり。

助谷、ふらふらと立ち上がり、踏み石に腰をかける。息をつく。ふと足先に触れた革袋を拾い上げて丹念に見、匂いをかぎ元気づいて腰を上げ、

助谷 今のはたしかに、ガランペエ……こりゃよいものが、手に入った。(煙草にむせてくしゃみをする)

みえを切って、そでとグランピエルが逃げ去った後をにらみつけていると、何やら、ごそごそと人影がしたので、びっくりして、落ちた刀を探して拾って身構える。

作右衛門、忠次郎、まきの三人が黙って、その前に現われ、両手をつき、ついで、くるりと後を向いて両手を回す。

助谷は驚いて、茫然としていると、今度は、後の方でふらふらと出て来て地に倒れ伏した者がある。

弥吉である。忍び音にこの若者は泣く。

—幕—

### 第三幕

植木屋辰之助の住居。草葺きの古い家。

土間と台所兼仕事場と座敷。土間の奥に竈。台所兼仕事場の奥に流しと大きな水がめ。欄間に黒さびた神棚。座敷には床の間とその横にかなり大きな仏壇。(信徒はこうして表面を糊塗したのである)

片隅に鏡台。座敷の裏は納戸で、台所から出入する。台所の隅に布をかけたお膳がおいである。土間には植木用の大小の鋏や麻縄が壁にかかり、仕事場には、木製の大きな火鉢と仕事用の道具、薬、大小の桶。やりかけの猿の剥製が台の上ののり、傍に完成した鷹の剥製。死んだ鳩や羽毛が散乱する。火鉢には蓋をとった鍋がかかり湯気が昇っている。

ただ一つの生き物は、天窓の縄に結びつけてぶら下がっている鳥籠のなかの真っ黒い鳥。いんこの一種。

床の間には白孔雀と、木の枝にとまっている二匹の栗鼠。

仕事場、行燈の灯の傍で、そでが系繰り車を回しながら、何かを気にしながら、静かに歌っている。

雨は依然として降っている。

そで わたしの胸に

きてちようだいな

いつもなつかし

ぜぜすさま

白いホスチア

ぜぜすさま

なつかしうれし

いただきまっす

(公教聖歌四百八十二)

戸を叩く音。

そで、警戒する。

辰之助の声　こら……こら、俺おるばい。誰だるが締めたとか、こら。(叩きつづける)

そで　お帰りませ、今あけます。今。(急いであけに行く)

鉢巻をし、襷をかけ、尻端折った辰之助が濡れ鼠で土間に駆け込む。

(第一幕と違い、身綺麗になっている)

辰之助　またお前か。うわあ、ひどか目に合うた。(手に持った鉦を乱暴に打ち棄て、濡れた着物をぬぎ棄てる。白い腹巻と下帯。非常に美しい)もう来んでんよかて言うたじゃなかか。

そで　(台所の水かめから桶に汲み、上がり口の下におきながら)濡れたでしよ。ご飯ごしらえはしてあつと。

辰之助　風呂には入らんでんよかごつ濡れた。

そで　精霊船のごたる罰当たりばするけんたい。

辰之助　おい、そるより、今夜、大騒動じゃったろう。

そで　(とぼけて)へえ、なんが。

辰之助　珍しか捕り物のあつたろが、大捕り物の。今夜は頭分の者だけばってん、そるでん百人以上やられたはずばい。

そで　義兄様あんしやまが昔の名前ば告げ口したとでしよ、権九郎に。

辰之助　おら、知らん。おら。

そで　おなみさんも召し捕られて、あんしやまは……どうともなかとですか。

辰之助　(足を拭き終わって上がり、納戸の方に行きながら)今度のことはあの女が発頭人じゃなかか。おっ母さんの葬式からたい。

そで ばってん、おなみさんはあんしやまとは……

辰之助 夫婦約束したわけじゃなし、もうしまいたい。

そで (にっと笑う)

辰之助 大体がこの頃、切支丹どもが妙に元気づいて来たけんやられたとき。俺の知ったこつか。

あの鬚面のフランス坊主がけしかけたにちがいなか。鍾馗坊主が。

そでが坐っていた部分の板が、揚げ蓋になっていて、かすかに板が持ち上がり、グランプ  
エルの鬚面がのぞく。

辰之助の声 (納戸から) なみにしたところで……ありゃ、あの縞の着物はどけ行ったとやるか、

こけぬいでかけとったとに。そで、そで。

そで なん? (土間に棄てられた辰之助の着物や鉦を始末していたが)

辰之助 俺の着物が見えん。

そで あ。(あわてて部屋に上がり、揚げ蓋の上に坐り、幕開きの姿勢に戻りながら) そんなら  
もいっちょの古かとは出してお着ませ。袖口は縫うてありますけん。

辰之助の声 なみにしたところで、今までん通り、聖源寺の和尚ば呼んで、おっ母さんの引導ば  
渡してもろてから、切支丹の葬式ば好いた通りにやり直せばよかるとに……神棚や仏壇は何のた

めに飾っとくとか。(箆笥の音がする)

そで (神棚を見上げ) ばってん、ほんとならそら悪かことでもん。

辰之助の声 そうやって二百年このかた、おったちの先祖は生きてきたじゃなかか。そるがいやさに俺は転んだとたい。

そで そるがいやさに、仏様ばやめたとです、召し捕られた人たちや。

辰之助の声 じゃけん、証拠ば見届けた権九郎が西役所に訴え出て、己の手柄にしよと思うたとさ。俺はなんも関係はなかとぞ。(着物を着換え、帯を結びながら出てくる) この夜更けに、お前やいったい、なんしとつとか。そこに坐って。

そで え? あのう…忘れ物ば思い出したけん…ほんなこつ、ご飯はもうすんだとですか。

辰之助 今日金曜日、せす、た、じゃけん、生臭はなかとじゃろ。

そで すんません。そるにちようど、盆じゃもん。

辰之助 面白かったぞ、大波止は。この雨でん、まっで芋ば洗うごたつと。皆、若か者が殺気だつてもものすごか勢じゃ。船と船と突き当たつて喧嘩する者も出て来るし、いやはや…ふだんは侍や役人どもの下で窮屈して圧さえられとる町の者が、こんときとばかりに叫び声ばあぐつとたい…ああ、喉が乾いた。お茶のほしか。おつとよかよか、お前にたのむとくせになる。

(鍋と鉄瓶とをとりかえる。煙草を吸う) 何して今時分系ばつむがんならんと。

そで (話題をそらして) そつで役人は、もう皆、引き上げた様子ですか、村から。

辰之助 役人？ ああ、そうらしか。おまき婆の家じゃ、娘たちが泣いとった。

そで 皆、召し捕られたとですか。

辰之助 親どもだけじゃろ、それにようはわからんばってん、五六人は逃げたもんのおるごたる。  
そで 逃げおおせたらよかなあ。

辰之助 ふふ：：：もうよかけん、お前は帰れ。そして明日からもう来んな。飯炊きでん、洗濯で  
ん俺が自分でするけん。

そで そんげんうちは邪魔へ。やっぱおなみさんがよかとへ。

辰之助 ばかが。やくな、やくな。どうせ俺のごたるもんはまともに暮らして行くごたることは  
できんもんばい。ひよつとしたら：：：よそへ行くかもしれんしなあ。はは：：：先のことはわか  
らん、今の日本のごと。

そで そら、何のことですか、あんしやま。

辰之助 ふふ：：：ま、心配せんで、よか。

そで 心配じゃけん、こうして来つとじやなかですか。もし、うちが皆と一しよに、牢屋に入っ  
たら、きつとあんしやまが不自由すると思うて、そるけん、のめのめと、こけ残つとつとに。

辰之助 へえ、恩に着すつとか、さかさまに。

そで もしあん人たちが、はりつけや打ち首にでんなったら、うちやこのまま安閑としちやおら  
れんけん。

辰之助 安閑としちゃおらんならどうすつとか。

そで あんしゃまば殺して、うちも死ぬ。

辰之助 ひどうぜぜず様に惚れたもんたい。はは……すまんばってん、あんしゃまはな、もちつと生き永らえさせて欲しかとじゃ。したかこのあつとたい。

そで 何の罪もなか多勢の人ば殺してまで。

辰之助 おいおい……

そで うんね。そうたい。そうまでして自分一人、この世に生きておったかですか。いったい、

あん人たちがおうちになんばしたというたですか、なんばしたと。商売の邪魔でんしたといわすたですか……恨みでんあつとですか。なんが憎かたですか。

辰之助 やかましか。俺の心はお前にやわからん。さ、早よ、出て行け。

そで うちやもう……あんしゃまが憎らしゆうしてしよんなか。

辰之助 ちようどよかった。頼みもせんに入り浸りになって、暇な隙がな俺のまわりばうろちよろさるつとはかなわんばい。お前んごと乳臭か子供にや、男の世話はまだできん、できん。

第一、俺は切支丹ば転んだ男ばい。俺に可愛がってもらおと思うたら、切支丹ば捨てて来い、切支丹ば。え？

そでの姿勢が瞬間くくりつけられたようになるが、噴き上げて来た涙をかくすように、糸

繰り車をつきのけて立ち上がり、つ、つ、つと土間におりて出て行こうとする。

辰之助 忘れ物は？

そで、戸をあける。

はっとして息をのむ。

髪を振り乱したなみが寝巻姿のまま立っていた。

なみ 入ってもよかでしょ。(入る)

辰之助 おなみさんか。今頃、ど、どうしたと。……役人は、役人は……

そで おうちは逃げんじやったとですか。弥吉さんは……弥吉さんは一緒じゃなかとですか。今までどけかくれとったとですか。

なみ (首を振り) 寒か……天満宮の縁の下にかくれとった。……まだ笛の……うんね……。 (うつろな声でぼんやり歩きながら) ぱあてる様は、どうされたかしらん……無事にお逃げなされ  
たかしらん……村はまって死んだごとひっそりと静まりかえっと……(そでに) おうちは  
ここで何ばしと……男衆と二人きりで、こんげん夜更けに……え？ 何ばしと……辰

さんのごたる曲者くせもんと一しよに……（あでやかに笑う）

辰之助 おいおい、なんば言うとか。

そで なんばしとろとおうちの世話にはなりまっしえん。こっちにはこっちで、そるだけのわけのあるとたい。世話やくなら、弥吉さんの世話でんしまっせ、ほんなこつ。

辰之助 また始めた。

なみ 弥吉さんは弥吉さん、うちの知ったことじゃなか。

辰之助 弥吉はやられたとじゃな。

なみ 大方……そうじゃろ。

そで 弥吉さんば見捨てて、よう平気でおらるつな。そるで立派な切支丹へ。なんへ、そのぞろつとしたなりは。まっで丸山の女郎衆のごたる。

なみ あら、悪うございました。そんなら、そう言うおうちはなんへ。暇な隙がな、義理の妹にかこつけて、誰かしやんのまわりばうろちよろするごたることは、うちやいたしまっしえん。

この頃の小便娘はほんなこつ油断のならん。

そで よし、言うたな。

辰之助 やめんかもう二人とも。俺は明日までにこの猿モンキば仕上げにやならん。

そで おうちこそなんへ。弥吉さんのごたる善か男ば振り捨てて、一月前までは奥さんのあつた人んところへ、そうつと泥棒猫のごと忍び寄って、なかの様子に聞き耳ばたてて、ふん、この

頃の脂切った太か女子はほんなこつ油断のならん。さ、ここはな、おうちのごと猫被りの図々しか者の来るところじゃなか。さっさと帰りませ。どけなりはって行きませ、弥吉さんと一緒に。

なみ わけあって来たとじゃけん、帰りまっしえん。

そで わけ？ 何のわけ？（揚げ蓋の方をちらとみて）まさか……

なみ 今夜でもう、私の運はきまるじやろう。

そで ははあ……（とっさに決心して）おなみさん、おうちはきつと、ぱあてる様ば探しに来たとじやろ。そうじやろ。

なみ え？ ぱあてる様ば。うちが？

そで もし、ぱあてる様が、今、どけおりなさるか、在り場所がわかったら……そこから連れ出し申し上げて、大浦まで送り届けてくるっじやろな。

なみ うちが？

そで そうさ。おうちはれっきとした切支丹ばい。

なみ おうちもそうでなかとは言わさん。

そで うちは、義兄様のおかげでお目こぼしたい。うちには役人は来んじやったもん……さ、切支丹のつとめば果たしまっせ。

辰之助 やかましか。いつまでごてごて言うとか。（立つ）急に腹の減って来た。喧嘩なら

外でしまっせ、外で。(お膳に向かう)

なみ ぱあてる様は、もう金比羅山の方へお逃げなされたとばい。(辰之助が脚を洗った桶で脚を洗う。素足が白く美しい)

そで はは……すらごつば言いますな。

なみ すらごつじやなか。

そで 言い逃れはできん。さ、どうすつと。ぱあてる様お連れすつとか、せんとか。

なみ ぱあてる様は、大浦へお逃げなされたとばい。うちやしらん。

そで ふふ……切支丹のつとめば果たしとうなかとじやな。

なみ ぱあてる様は……ぱあてる様はもう……

辰之助 あ？ あの鍾馗坊主がどうかしたとか。

そで ぱっぱ様のお使いのぱあてる様はほったらかいて、好いた男ん傍にへばりついておったかとか。

なみ うんね。うんね……

そで どっちへ。

なみ そんげん……どけおらすかわからんごたるお人のことで、返事はできん。

そで ふん。まあだ切支丹の志は残つとつとみゆる。そんなら、もちいと分別ば立てにやならんことば教えてあげまっしゅ……おなみさん、切支丹の女子はな、切支丹の男でなか人とは夫婦

にはなれん。

なみ ああ！

そで あんしゃまはもう転び切支丹で、転び証文も庄屋に届けた。じゃけん、おうちとあんしゃ  
まとは夫婦になれんことは知れたことばい。どうへ。こんだこそはつきりとわかつつろう。ふ

ふ……

なみ (決然と)なるつとも。

そで なれん。切支丹の掟が許さん。

なみ なるつとも。

そで なれん、なれん。

なみ うちも切支丹ば転べよかでしよ、うちも。

そで へ、おうちが。

なみ そうたい。

そで ふん。先祖伝来の教ば捨つると言わすとか。

なみ うちも切支丹ば転んだ。今夜にでん庄屋に届けてやる。(叫ぶ)転んだ、転んだ、転んだ。

辰之助 おるの真似せんでよか。やかましか。

そで 地獄に行くぞ、いんへるのに。よかとか。

なみ よか、よか！

そで 裏切者！（道具の一つである手術用の鋏の如きをつかんで突いてかかる）悪魔！ あんし

やまば 転ばかしたとはおうちじゃ。悪魔女郎！

なみ うわあ！

辰之助 ばかもん！（素早く、そでを引きとめて、切出しを奪いとる）

そで （泣きながら）あんしやまはおるのもんばい。おるのもんばい。誰の手にでん渡すもんか。

なみ ああ、びっくりした。（なだめて）おうちはまあだこまか。色恋の道がわかるもんへ。な

もう二三年たったたら、いくらおうちでも少しは女子らしゅうなつて。

そで うんね、わかつとる。義兄様は姉様にやさしかった。畠仕事もさせんじやった。ふだんは

威張り散らしておとろしかごたる男に、こげん裏のあることば初めて知った。うちがまあだ小

娘で、色恋の道など知らんと言わすなら、言うてやる。そこの揚げ蓋の下にかくれとつて、手

練手管の数々から、はては寝間の睦言さえ、細大漏らさず聞いとつたばい。

辰之助 うわあ、こらあ！（愉快そうに笑う）

そで おうちはまだ手入らずでしよ。まあだ寝たこたなかでしよ。うちの方がずっと大人ばい。

辰之助 はは……大した手入らずばい……

なみ いやらしか。そげん男がほしかとか。

そで うちのほしかとは男じゃなか。男じゃなか。

なみ なら、何へ？ 何へ？ そうら、言われん。

そで 自分が……自分がほしかとじゃ。相手がなけらにや、自分ちゅうもんはわからん。

なみ うんね、そらちがう。うちは相手のなかで、自分は消えてしまいたか、しまいたか。

辰之助 (仲に割って入り) もうよか、よか。お前たちや銘々に、つまり、ひとり相撲ばとつと  
るだけばい。俺あ、誰のもんでんなか。

なみ  
そで } うんね、うんね。ちがうと。

辰之助 よし。そのわけば、目のあたりに見せてやる。そで、戸口ばしっかりしめて来い。

そで 戸口！

そで、しめに行く。

なみ (なまめかして) うちは、ああたのために転んだと、ああたのために。

そで (振り向いて) こすかぞ。

辰之助 (その手を振りすてて) ばってん、よかか。誰にも言うな。もし他人に一言でん洩らし  
てみる、お前たちも同罪じゃぞ。よかか。

そで なんが同罪へ。(なみに) 出て行け、早よ。

辰之助 秘密の南蛮貿易じゃ。

なみ 言いません。(そでに) おうちこそ、行きませ。

辰之助 よし二人とも、こっち来い。(座敷の方へ行く) 来い。

そで 秘密の南蛮……？

辰之助、行燈を下げて隣の座敷に行き、仏壇の前あたりに行燈をおく。そではすぐ行こうとするが、なみはそでを警戒している。

辰之助 来い……来んか。見せるもんがある。

そで 何へ、いったい。栗鼠の死に殻ならもう見飽きとつとに。(なみの傍を通りながら) 転び

切支丹の淫売。

辰之助 だまって来い、だまって。

なみ (鳥籠にさわり) 黒……黒。

そで 今頃、皆はどうしとつとじゃるか。(言いながら揚げ蓋の方を気にしながら座敷へ行く)

辰之助 坐れ。

そで 何ばすつとへ。

辰之助 よかけん坐れ。なみも来い。

三人が隣室へ移動して大分経って、揚げ蓋はすっかり持ち上げられ、辰之助のツンツルテ  
ンの着物を着たグランピエルが現われるであろう。そっと隣をうかがう。

辰之助 よかか、声ば出すな。

辰之助、仏壇の前にうずくまり、何やらして（これは止め木をはずしたのである）再び立  
ち上がり、横の鴨居の額の後にかくされた綱をひっぱり始める。

辰之助 よかか、じっとしとれよ。（綱に力を入れる）見せてやるけん……そうら。

蝶番になっているのか、仏壇そのものが音もなく前にあくと、その後垂れ幕がかかって  
いる。

そで  
なみ  
あ、あ、あ……

両人は離れて坐っていたが、腰を浮かして、どっちからともなくお互いにすがりつく。

辰之助 声出すなて言うたろが。

そで (慄えながら) な、な、な、ない……

見ろ、と辰之助、さつと幕を引く。そこは、幅四尺、奥行きもそれくらいの壁の凹みになっていて、つまり、押入れの如きであり、行燈のほの暗い光に馴れてよく見れば、裸の若い女が立っているが、実は倒れないように、背中のところに細い支柱が縦に支えている。

そで あねしやま  
姉様!

なみ おこいさん!

二人は叫んで立ち上がるが、そのまま、へなへたと坐り込み、十字を切る。女身像は辰之助の亡き女房、こいである。長い髪の毛が濃い艶やかな黒さのまま房々と垂れ下がり、左の手が両の乳房を軽く支え、右の手が前を押え、豊かに円い臍が深い影を湛たえ、左の片脚をいくらか内側に曲げ、静かな羞じらいを失わぬ微笑を湛えた顔は、心持ち横を向いている。細い指の先が美しい。

辰之助 見たか……俺おるの栄光ぐらうりあは見たか。

そで (慄えながら祈る) 天にましますわいらがみおや、みなたつとまれえ、なおきたりたも

なみ う。天におつておぼすまあるごおく、地におつてもあらずもう。

なみ 生きとつと？ 死んどつと？

辰之助 墓のなかから、掘り出したとき。生き返ったとき、はは……

そで わいがにちにちのおんやしない、こんにちわいらにあたいたもう。わいら人にゆるし申す  
ごおく、わいらがとがをゆるしたもう。わいらをてんとさんにはなしたもうことなくよ、わい  
らをきようあくよりのがしたもう、あんめんぜぜす！

辰之助 きれか！

なみ きれかあ！

辰之助 われながらきれか！

なみ きれかあ！

辰之助 俺の神……ベヌウスの神！ ……そで、なみ、どうじゃ、死に殻とは見えんじやろ。

そで 姉様の、死に殻！

なみ 生きとらすごたる。

辰之助 一月前に死んだ。魂も、どっか吹っ飛んでまた帰って来た。現に生きとろうが。見ろ。  
ふっくらと水々しゅう。つやつやしゅう……赤味も消えず……きれかなあ！

なみ おうちは、そるじゃ、この女子ば、いつでん抱いて寝<sup>ね</sup>っとじゃな。

辰之助 はは……牡丹燈籠じゃあるまいし、俺の命ば吸いとられてたまるもんか。ばってん、いつ見てもきれかなあ！

そで 昼は寝て、夜起きて、こるば作っとらしたとか！

辰之助 ガラスの目ん玉けん動かん。息も通わず、物も言わん。五本の指も止まっとつと。ばってん、生きた血が、俺の血が通うとるかもしれん、はは……

そで ひどかばい、ひどかばい……こるじゃ成仏できん……成仏できん……（祈りを繰り返す）

辰之助 蝙蝠のごたる暮らしばして、まる一月はかかった。そで、お前に気取られまいと、えらく苦労したぞ。

なみ これほど思われるおこいさんが羨ましか。

辰之助 ふふ……思いちがいすんな。俺が、こるば作ったとはな、売るためじゃ、金にするためばい。

なみ へ！ 金に？

そで だ、誰が買うと！

辰之助 オランダ人たい、出島の。

そで オランダ人に売り渡すとですか。

辰之助 うん。恋女房を売るとばい、ちつとやそつとの金じゃなかぞ。銀八百枚じゃ。

なみ うわあ！

そで 姉様が可哀そか、可哀そか……南蛮の国に運ばれて……じろじろ見世物になって……あん

まりばい、あんまりばい……（泣く）姉様の魂はどけ行くとじゃろ。

なみ そるじゃ、いずれは、ここから出してしまおうとですな、ここから。

そで 姉様が可哀そか、可哀そか……

辰之助 なんが可哀そかか。土んなかに埋めとけば、腐れて骨ばっかりになるところば、こげん

きれいにしてやって、なんが可哀そかもんか、こるこそ女の冥利とは思わんか。

なみ きれかあ！

辰之助 こるば手離れたら俺はもうこん浦上には何の未練もなか。出て行く。

なみ へ！ 何て言うたと。

そで 出て行くと言うたのですか。

辰之助 そうたい、出て行く。この息のつまるごたる村からも日本からも出て行く。あの三つの

丘ば越えて東に行く。俺はしたかことこのうんとある。あるもしたか、こるもしたか。先ず手初

めに神奈川に行く。

なみ 神奈川に。

辰之助 船に乗る。

そで 船に。

辰之助 船に乗る、蒸気船が不都合なら帆前船でんよか。

なみ ああ！

辰之助 長崎の町に出て、大波止の岸に坐りこんで、港の沖ば眺めて暮らしたもんさ。あの三本マストの蒸気船や軍船ば見るたびに、厳しか見張りばすり抜けて、なんとかしてあんなかにもぐり込めんもんか、いつでんかつでん考えとった。

そで 船に……南蛮の船に！

なみ 船に乗り込んで、何ばすつとへ。

辰之助 南蛮やアメリカに行くとき、この死に殻ば売って金のできたら、神奈川で船ば買う。船に乗って、海原遠く、世界の果てまで行って見たか。シイボルト先生から聞いて俺はよう知つとるし、実は地図もちゃんと作つてある。おうちたちも話にや聞いつろう。日本はもう今までの日本じゃなか。徳川様ももうおしまいばい。

なみ へえ！

そで 百姓もちつたあ楽になるじやろか。

辰之助 さあ、こんだ禁裡様ばつてん、どげんなるかなあ。とにかく変わるはずじゃ。おろしやの軍艦が三月も長崎の港に頑張つて動かさず心配したことあったろう。アメリカから電信機てれぐらふやら汽車やら入つたげな。日本からもアメリカに使いが行つたと。今に、どこでん好きなどころに行つてもよかごときつとなる。俺はもう、こげん浦上のごたる田舎で、のんびり植木ばいじ

ったり、毛物の死に殻、生き殻ば作ったりしちやおれんとばい。

なみ 世界の果てに何ばしに行くど。

辰之助 よかか。米にしろ布にしろ、この頃、物の値段は高うなるばつかたい。何してそうなる  
と思う？ そらな、仲買いの商人が買い占めて、オランダや支那に売るからじゃ。生糸や茶で  
んそうたい。

そで そるじゃあんしやま兄様は商人になつとですか。

辰之助 そうたい。ところで俺の商売はちと変わつとる。何じゃと思う。

そで ……

辰之助 鉄砲と火薬じゃ。

そで 鉄砲？

辰之助 糸や茶ば売つてその代わりに鉄砲と火薬ば買うとき。はは……

そで おとろしかことば思いついた！

辰之助 何も俺おるは金儲けしたかとじゃなか。志ば立てて男一匹、人間一匹、自分の力ば思い切り  
ためしてみたかとじゃ。そう思いつかせたとが（こいを見て）こるさ。（傍により、囁くよう  
に）こい！ こい！ なるほど、この色身の中味は、黒か灰やら白か灰やら毛屑やら、それと  
マイサルクタニウムと無機物ばかりがつかまつとる。ばってん、中が何であろうと、さわれば冷  
やっかつめたかろうと、生きとるときよりもきれかとは思わんか……そで、なみ、人間のこと

の分別として、人間とは色身ばかりに非ず、果つることのなきアニマ、魂を持つと年寄りどもに教えられ、たとえ色身、土灰になるといふともアニマ終わることなしと、アニマ、魂と叩き込まれて来たばってん、人間の魂とはいったい何じゃろう。死んでからの魂にどげん楽しみのあつとじゃいろ。現世に生き、この目で見、この耳に聞き、この手で触るるものに魂はなかとか、え？ こい、は死んでしもうたばってん、こうしてちゃんと生きとるじゃなかか……実際に息ばしとったときよりも生きとるじゃなかか。あの初々しか唇……あのふたあつのまあるか胸……あのひろびろとした野原……影ば落とす深か井戸……べぬうすの丘……俺の栄光！

辰之助の声は、しかし案外、冷やかに乾いている。自らの言う栄光に酔っているところは見えないのである。

辰之助 (こいに) もうじき、お前にも別れねばならんかと思うと心残りはするばってん、も一つの、もつと大きか栄光ぐろりあが待つとつと。新しかもんは古かもんば踏み越えて行かにや生まれ出ることはなか。

そで 姉様あねしやまは兄様あうしやまのおとろしか了見いけにえの犠牲いけにえになつたとばい。人身御供あうしやまばい。  
なみ うんね、犠牲でん人身御供でんなか。辰之助さんの魂になつたと。  
そで へえ！ そんならおうちも早よ死んで、姉様のごと死に殻になりまっせ。

なみ　そつで辰さんが喜ぶとなら、うちやいつでん死んで見する。そして辰さんの魂はひつつかんで生きかえって見する。女の喜びとはそんなげんもんばい。おうちにはわからん。

そで　ああ、なんして女に生まれて来たとしゃろ。

辰之助　こい！　こい！　お前は決して土灰にはならん。お前の色身ば土灰にはさすることじゃなか。いつまでも現世に生きて、果つることなき真実となれ、その真実で、オランダ人に可愛がってもらえ。真実を創り出したはぜ、ぜ、すではなか。この俺ばい。俺の栄光ぐろうりあ！

グランピエル、躍り出た。

グランピエル　この外道！　いどらあとる！

辰之助　やっ。

そで　ばあてる様！

なみは部屋の隅にかくれる。

グランピエル　天を怖れず人を尊ばず、自我えごの妄執に憑かれし鬼！

辰之助　鍾馗さんのガランペエか！

グランピエル 去れ、汚れの偶像！ 異端の女神！ てんたさんの蛇！

辰之助 ま、お静かに。目の保養ばい。他ならぬおうちには、とっくり、ただで拝ませますけん、もちっと近寄って穴のあくほどようお見ませ。

グランピエル 異端ぜんちよの悪魔。利欲に迷うて恥を失い、犬畜生にも劣る所行！

辰之助 そう言わんと見ときませ、南蛮に渡す前に。こんげんもんはえ、と、見られんとぞ。

グランピエル おっ。(と叫んでこいに飛びかかろうとする)  
そで 待って。(と、グランピエルの脚にからみつく)

辰之助 どうぞ、どうぞ。(そでに) 傍に寄って見たかそうじゃけん邪魔すんな。

グランピエル (こいの前に立ちただかつて両腕を揚げて威嚇する) うーむ、む……

裸の女の顔が気のせいとか、こつちを向いて、流し目にグランピエルを見て、にっこりした「よう」である。

グランピエル め、のん……め、のん……(と言って退きながら、胸から十字架を引っ張り出し、いささかしどろもどろに) い、いんのうみね……いんのうみねばあちりす、えと……えと……そで ばあてる様、おゆるしなされませ、おゆるしなされませ……

グランピエル (勇気を取り戻し) 汝の讚くろつりあうる栄光こそ、暁の星の如く露の如く、やがて頼母し

き太陽の光に会えば、果敢なく消えて失せましようぞ。

辰之助　　なんが、なんが……シイボルト先生より授かった死に殻作りの俺の腕前、千年万年たつたとて、色も変わらず、香も失せず……

グランピエル　かのエジプトの木乃伊ミイラを見よ。たとえ形は残るとも、色は変わりてすさまじく、萎え縮みたる骸むくろなり。

辰之助　　萎えもせぬ、縮みもせぬ、皺一つ寄らすことではなか。も早、死に殻ではなかと。新しか生命ばい。そんげん、目ばそらさんともつとよう見てみませ。

グランピエル　よくよく見れば、うつせみのはかなき仮の姿なり。叩けば白き骨と骨、かさ……かさ……かさ、かさかさかさ、冷たき音を汝聞かずや。

辰之助　　なんが、なんが。べぬうすの血のたぎる音。

グランピエル　否、あやしき地獄の音にて候ぞ。

そで　　ばあてる様！ あんしやまにかまいますな。うちがお連れしますけん、山越えに大浦に帰りまっしょ。大浦に。

辰之助　　偶像、偶像て言わすばってん、ばあてる様、ゴアの本部にあるちゅうあの片腕は何へ？

日本切支丹の開祖、ざびえる様の片腕ば、やっぱ祭り上げとるじゃなかですか。

グランピエル　奇蹟のあかしにむかい何たること。主よわが怒りをかきたてたまえ。そで　　気の狂うとつとです、打てあいますな、打てあいますな。（神父を引っぱる）

グランピエル 汝には更にとくと申したき……

そで さ、さ。(隣へ退らせる)

辰之助 あら偶像の片割れじゃなかとですか。つまりは、おうちたちにとって、魂と同じもんじやなかとですか。この俺が作った偶像は、新しか色身も同じこと、とこしえに果つることはなかと。な、なみ、そうじゃろう。

なみ、嬉しそうに辰之助に寄り添う。

辰之助 あのきれか形こそ、俺が魂！ いんへるのであるうと、ぱらいそであるうと、ぶるがとおりよであるうと、自由自在にかけめぐる、喜びの、楽しみ、哀しみの、苦しみの、痛みの、つまり人間としてありとあらゆる命を湛える器たい。こっちおいでまっせ。遠慮せんでよか、見たかくせに。

なみ ばあてる様、どうぞ。

グランピエル 黙れ、女！

なみ おっとろし！

そで ばあてる様、あんしやまは海に行きたかとです、海に。行かした方がよかとです。切支丹の訴人はあんしやまです。末はどうせ、畳の上では死ねんでしょ。行かしてくれまっせ、行か

して。あんしやまの罪の償いはうちがいたしまっす。

グランピエル 否、否、魂をまてりあるの美と利欲に売る、自由放埒の海でござろう……（進み出て）いかに辰之助。

辰之助 なんへ。

グランピエル い、いかに辰之助。

辰之助 なんへ、いったい、威丈高に。

グランピエル 汝に言いおくことのござれども、（声を低めて）その裸形の女人とて、着る物無うては寒かろうし、蚊も喰おう。

辰之助 へへ……そろそろしまおと思うところですよ。なみ、しまいませ。

なみ、幕を張り、綱を引き、仏壇を元通りにする。その間、グランピエルとそでは祈っている。

グランピエル 忝けない。（現金に威圧的に）さて、いかに辰之助。汝、罪科の源なる七つの科のことを知れるや。

辰之助 また説教ですかい。ああ知つとりますばい。こまかときから覚えさせられて、本当のわけはわからんでん、カテキズモなら、まあだ暗くらで言えまっしょ。

グランピエル 言えるほどのことではない。いかほど重きモルタル科とがに当たれるかを汝に問うなり。

辰之助 へへ……まさか、十字架にかかるほどのことではなかでしよな。

グランピエル モルタルとは命を絶つという心なり。ナツウラの上なるアニマ、魂の一命はぜぜすよりの恩寵なれば、その恩寵、魂よりとりはなすとなれば、すなわち命を絶つにひとしきもの。

辰之助 へえ！ ナツウラの上に、自然の上に魂があると言わすですか。へえ！ ナツウラこそ上かもしれんし、そんげんことは大体が、きめらるることじゃなか。物事は相対あいたいに在るものばい。

グランピエル 否、否、ぜぜすの作りたまひし万の作物、天地万像のうち、ナツウラとはそのなかの僅かなる部分に過ぎず。万事叶いたる天主の御ちえは宏大にて、わたくしどものかりそめに計り能うところにてはこれ無く候。たとえば汝のその色身たりとも、汝のちち、ふはふは(母)、御作のもののかと思は浅慮にて、ひとえにぜぜすの御じひの上より、ぜぜすの恩寵をもて作られたるを。

辰之助 ふふ、恩寵、恩寵か。むかむかして来る。俺はな、別に生んでくれて頼んだ覚えはなかばってん、お父つつあんとお母さんが誰でんするごたることばしたおかげでひり出されて来たとしやし。

グランピエル（眉をしかめ）おう！

辰之助 太うなってからは、この自分の腕の力で生きて来た。恩寵のおかげとやらんは知らんばい。

グランピエル そのような分別こそ、罪科つみとがの源なる七つの科の第一なり。辰之助殿、これが最後なればよう聞かれよ。己が力とのみ恃むこそ、すなわち、傲りたかぶる高慢の悪。やがて己れ自らをも恐れず、精神スピリットの在りか乱れ狂い、果ては身を滅ぼす基にて候ぞ。

辰之助 高慢で言わすとか。

なみ（真中に進み出て）そんげん脅しにはもう乗りますな。世の中には善かこと悪かことの外に、おうちたち坊さんには関わりのなかことのあるとです。おうちはすっこんどりませ。

そで（負けじと進み出て）へえ！ そのもんとはいったい何へ。男ば墮落さすることじゃなかか。

なみ ちがう。墮落と言いたかなら言いませ。罪科つみとがのかんねんから解き放たれてみれば、世の中や人間がなんてちがうたもんに見ゆることか！ 真実ちゆうもんは、人間のなかにあるもんばい。そるに真実ば定めるもんは、ぜぜすではなか。やっぱ人間たい。この自分たい。

そで 真実だけが……真実だけが人間ば仕合わせにするとは思われん。もちっと別の、別のなんかがあると。

なみ 別の何かって何へ？

そで そら、つまり……ううむ……

なみ 何へ？（笑って）夢のごたる作りごとにだまかされとっとき。

そで うんね、夢は夢でん、この世に人間が何のために生まれて来たか、そんなこつば指し示して下さる夢じゃ。そのわからん不信心どもはほんなこつ哀れで気の毒か。どげん樂しか目に逢うてもまことの仕合わせとは似ても似つかんもんじゃもんなあ。

なみ たとえ不仕合わせになったところで、身を滅したところで、そるもまた、きれか、いさぎよか。

そで そるじゃ後生のたすかりは。あにまは、あにまは。

なみ どうでんよかです、どうでん。

そで この……（なみに飛びかかって撲りつける）おうちは人間じゃなか、人間じゃなか……

グランピエルはそでを、辰之助はなみを押えて引き離す。

グランピエル まりあ殿、これ、まりあ殿……

なみ やったな。子供と想着がまんしとったばってん、もうかんべんせん。

辰之助 相手になるな、相手に……

そで （暴れながら）離してえ……離してえ……ばあてる様、この女子ですばい、辰之助さんば

墮落さしたとは。……喉笛に喰いついてやるけん、畜生っ……離してえ……

グランピエル（ぎゅつと双腕に力をこめて、そでを掴み、その顔を見据え）まりあ殿、しっかりと  
りなされ。

なみ おうちのこんたんはわかっとなる。えっと聖人面すんな。

そで うちがついとらんと兄しゃまは地獄に行く。あ痛。そんげん腕ばつかむと痛か。（司祭を  
打つ）

なみ 二人だけの極楽に行くよ。

そで 二人だけで行かするもんか。

グランピエル まりあ殿、わたくしの目を見てたもれ。そなた、それほどまでに、それほどまで  
に。

そで こんげん女子に兄しゃまは渡されん。

グランピエル これ、まりあ殿。そなた、それほどまでに辰之助がいとしいか……恋しいか。

そで ない。（べそをかく）ああ！

グランピエル それほどまでに人間をお信じめさるるか。

そで （泣きながら）ない。

グランピエル 恩寵のめぐみと、この世の命と、とりかえても苦しゅうないか。苦しゅうないか。  
そで（同じく）ない。

なみ ほほ……

グランピエル （荒々しくそでを突き離し）おう！ 女！ 女！ 女！ 見目うるわしけれど、

なよなよと風にも耐えぬ風情なれど……（そでの方をちらり見て）いささか色は黒けれど、だ

まくらかしの名人で、こけつと、見栄坊、わからず屋！

なみ ほほ……

辰之助 はは……その通りですたい。ぱあてる様、その通りですたい、はは……

グランピエル のん、こめでい、ふらんせえず！ のん！（しよげる）

ふと、なみの笑が、苦しそうに途切れ途切れになり始めたと思うと、そのからだは辰之助から離れ、力尽きたるもののように畳に両手をつく。感情の昂まりが今や嗚咽に変わっている。

反動が女の素朴な肉体を鞭打っている。しかし、なおも女は笑おうとする……笑おうとする……鳥籠の「黒」が羽ばたきして、「けつ、けつ」と鳴くのか笑うのか。雨……

——幕——

#### 第四幕

港をすぐ眼下に見下ろす西役所の一室。

正面は一面の武者窓。今、中央の障子が、夏期のことゆえ開放され、港の水は見えないが、対岸の稲佐獄が遠くにかすんでいる。

上手下手は襖で仕切られ、ガランとしているが、隅に書記用の軽い机が置かれ、正面より上手寄りの畳の上に、主の居場所であろう、薄い毛布を敷く。鼓笛隊が行進曲を練習している音が聞こえている。

下手の襖が開き、洋式の軍服を着た侍が入って来る。

侍  
入れ。

後手縄のままの作右衛門、忠次郎、弥吉、まき、くら、しのが入って来る。最後に、私服の同心が一同を見届けて、襖をしめて去る。

前幕から半月ほど後である。皆は、惨酷な牢屋暮らしでからだは大分参っているが、闘志は衰えていない。

侍　そこに並んで控えておれ。かつてに喋るでないぞ。

一同、正面から下手に坐る。侍去る。

作右衛門　しばらく振りじゃな、おまきさん。女子衆の方はどうかな、元気か。

まき　皆、元気ですばってん、何しろ、狭かところに三十人も四十人も押しこめられて膝ものばされんごたる。

忠次郎　小島の牢からここまでわざわざ連れて来て、何すっとじゃろ。

しの　白洲にひっぱり出さるっと思うとったに、

くら　こげんよか部屋に上がらして、

まき　誰も、それについてらん。

忠次郎　気味ん悪かな。

まき　ほんなこつ。

くら　作爺様、おうちはいっち年寄りけん、からだにこたゆったじゃろな。

作右衛門　おらか。おらあ、若か者にも負けん。

しの　弥吉、どうしたと、元気んなかじゃなかか。

弥吉 (物憂く) ああ。

くら 十六日も風呂に入らんと汗臭うはなるし、かゆかし、

忠次郎 しっ。

下手の奥で、「助谷権九郎殿……助谷権九郎殿」と呼ばわれれば、「おう」と応えた。

まき (そっと) 権九郎の来とつとばい。

弥吉 <sup>だる</sup>誰が来ようと、もう<sup>おと</sup>怖ろしかもんはなか。

やがて羽織袴の助谷権九郎、扇子を使いながら、いつものようににこにこことやって来た。

助谷 おう、おう、皆の衆、情なか姿で、可哀そうに。今日はこの六人か。他の衆も、さぞ不自由しとるじゃろうが、達者か。中の郷の平衡門も無事か。里郷のおたえは今月が臨月のはずばってん、どうしとるかの。その分じゃ牢屋で子ば産まんならんな。

一同の前を通過して、一同より上手に席を占める。

助谷 暑かのう。そうやって繩目の恥ば受けんならんのも、よかか、俺のせいじゃなかとぞ。こ  
るも皆、わつたちが自分かつてに、お上の掟に背いて、邪法の切支丹しんごうば信仰するけんたい。ど  
うかな、作右衛門、そろそろ転んでよかじゃろ。その顔の傷はどうしたと。

作右衛門 はは……牢名主にちよつと、なでられたとたい。

助谷 忠次郎、狭か牢屋に押しこめられて、さぞ暑かろう。のみもおろう、しらみもおろう。

忠次郎 ぜぜす様のご受難のことは思えば、このくらのこたあ何でんなか。

助谷 ほほう。まき、娘たちがどうしとるか心配じゃろうの。転びさえすれば、すぐにでん帰ら  
るつとに。

まき もし転んで帰ったら、鬨はまたがせて、留守の者は言わすばい、きっと。

助谷 弥吉、わらが一番やせたな。牢屋の飯はうまかか、え？ はは……早よ帰って、たらふく

米の飯ば食べとうなかとか。

弥吉 たらふく糞ば垂るつためか、わらのごと。

助谷 はは……おい、弥吉、おなみがその後どうしとるか、知りとうなかか。

弥吉 ふん、そんげんことくらいとうに知つとる。わらのとけ転び証文ば出して、辰之助と一緒  
に暮らしとるそうじゃなかか。

助谷 やっぱ知つとらん。その後のことが大ごつたい。

弥吉 その後……そら夫婦仲よう暮らしとるじゃろ。そんならよか。俺はよかと。

助谷 そつで、口惜しゅうなかとか。

弥吉 うんね。

助谷 ほんなこつか。

弥吉 可哀そうには思うばってんな。

助谷 可哀そうに。そらまあそうたい。

まき どうかしたとですか。

助谷 う？

弥吉 辰之助は、あら、尋常の人間じゃなか。腹黒か男ばい。何しでかすかわからん奴じゃもんな。

助谷 その通りたい。おなみはな、その後がようなかとばい。

弥吉 何ばいったい言いたかとか。

くら ちゃんと祝言の式ばあげたとへ、皆の前で。

助谷 う？ そら、皆の前ではせんじやつたばってん。

弥吉 そうか。何にしても仕合わせになつてくれればよか。……よか。浦上に帰ったら、おなみに言うてくれませ。改心して元の切支丹になるごと弥吉は祈つとるてな。

助谷 ところがな、弥吉。そるがそうはいかんとばい。この間、二人でえらい大喧嘩ば始めてな  
あ……

しのしっ。

上手の襖が開いて、帳面を持った祐筆を先頭に、代官、中次一平（四十三歳）と聖源寺和尚、真哲（六十歳）とが入って来る。同時に下手から先刻の侍が現われて、囚人たちの下手に坐り、中次は中央の定め席に、祐筆はそれより上手、机の前に坐り、墨をすり、記録の準備にかかる。

助谷（平伏して）ご苦勞にござりまつす。浦上の庄屋、助谷権九郎兼久、証人としてまかり出ておりまつす。

中次 大儀。一同揃うたか。

侍 はっ。特に頭立ちたる者にござります。（一同に）御代官、中次一平様、直々のお取調べである。ご慈悲と思え。

一同 はあっ。（平伏する）

中次 仔細あつて今日、予が直々に取調べる。と申すより、そちたち切支丹と膝を交えて篤と談合いたし、そちたちの心根のほどを知りたいのじゃ。これ、一同の縄を外してやるがよい。

侍 はっ。（縄を外しにかかる）

助谷（立って手伝いながら）おやさしか代官様じゃ。さぞ、痛かったらうのう。

真哲 わしの顔に見覚えがござるかの。フランス寺の和尚でのうて気の毒かばってん、聖源寺の真哲じゃ。浦上の衆には、元来、ひどう世話になつとるばってん、この頃、浦上では極楽参りの死人打ち絶えたと見え、おかげで皆の衆からのお布施はなし、本堂修復の喜捨も願われず、いやはや、勝手元は火の車ばい、はは……

助谷 申し訳もござりまっしえん。よう諭し聞かせましたとばってん、拙者ごときの申すことは、いっちょん聞き入れてくれまっしえん。(一同に)これやい。そうそうお上にお手数ばかりかけらでなかぞ。この場所ば何と心得とる。畏れ多くも將軍様の……

中次 これこれ、まあ、そうがみがみ言わずとよい。無知なる百姓どもじゃ。温かき親心を以て臨むがよい。

助谷 へーい。

中次 聖源寺殿、くれぐれもそのつもりで。

真哲 へい。さて、では改めて聞くとするが、わたたちの切支丹は、初代権現様以来三百年、堅くご禁制のことは知つとるじゃろうの。……どうかな。

作右衛門 へえ。

真哲 ばてれん、いるまん訴人すれば銀三百枚との御高札も建つとる。知らんとは言わさんばい。作右衛門 字は読めませんばってん、聞いて知つとります、へい。

真哲 知つとりながらご禁制を破つたちゆうわけじゃな……そうじゃな。

作右衛門 どうもすみまっしえん。

真哲 そるが第一心得ちがいと思わんか。

作右衛門 へい。

忠次郎 ばってん、御上納から、賦役から、よろずにつけて何でん仕りました。

まき お上に背いたことはありまっしえん。

しの  
くら } ありまっしえん。

真哲 だまれっ。そんげんこつくらいでだまかされんぞ。將軍様はわったちにとっては親も同然じゃ。日本という国は、將軍様ば親とした一つの家内のごたるもんじゃ。親はどこまででん子供のの面倒ば見ると。その親に、肝腎要のことで背いてよかと思うか。

助谷 そうじゃ。

忠次郎 どうもすみまっしえん。

真哲 そんならその親の言いつけ通りにすればよかとじゃなかか。日本には千年万年の昔から仏様のお教がある。お釈迦様が衆生済度の悟を開かれたお教たい。そるば、訳もようわからんくせに、南蛮渡来の教じゃからというて、異国の仏ばありがたがっつる。

くら おったちも先祖から代々守って来ましたけん変えるわけにはいきまっしえん。

まき 南蛮渡来じゃけんちゅうわけではなかとですよ。

真哲 そんなら何じゃ。わけば聞こう。

まき ただ、なむあみだぶつて言うだけのことじゃ楽しみのなかとです。

中次 ふふ……

助谷 ふふ……

真哲 な、なんじゃと、もったいなかことば言う。なむあみだぶつと唱うるだけで、どんげん悪人でん極樂往生ばなし遂げられる。そるが仏の慈悲。日本では、禁裡様でん將軍様でん、その慈悲におすがりなさるほどありがたくも尊かとじゃ。

助谷 わつたちは食わず嫌いたい。よう知りもせんで仏様は好かんてろんかんてろん我ば張るだけじゃ。後生の扶たすかりなら、わが日の本にもこげんよか教のあるじゃなかか。

しの よか教かもしれませんばってん、切支丹よりよかもんはありませんけん、仏様ば拜むわけには参りまっしえん。

真哲 わからん奴じゃな。お釈迦様でん切支丹でん、行きつくところは、極樂じゃとすれば、古来、日本で信仰しんこうさる方についたらよかじゃなかか。

まき うんね、お釈迦様よりぜぜす様の方がえらかとです。

助谷 ほう、なしてか。

まき ただ、えらかとですよ。

助谷 ただえらかとですじゃわからん。

まき そこんところば知りたかったら、すみませんばってん、フランス寺の和尚様に聞いてくれ  
まっせ。よう知つとられますたい。

しの うちたちは、まあだ稽古中のけん、えっと知らんとです。

真哲 日本の国に生まれ、日本の地つち、水、火、風から作られ、育てられ、安穩にその日を送りな  
がら、それらの恩ば忘れて、いったい、人間として恥ずかしゅうはなかとか。犬畜生に劣ると  
は思わんか。

作右衛門 天に在まします天主様こそ、その地、水、火、風、なんごつもお作りなされた諸善万徳の方  
でござりまっす。

真哲 いやいや、仏様こそ万物の本元であらっしゃる。

作右衛門 仏様には魂のありますとか。

真哲 あるどころか、魂だらけばい。

作右衛門 ばってん仏様が死んなさったら、魂はどげんなつとですか。

真哲 また元の空に帰するだけじゃ。

作右衛門 空？

まき 空？（仲間とうなずき合う）

真哲 空とはこの広大無辺の宇宙というもんじゃ。万物は何でんかつてん、この宇宙のなかば流  
転すつとたい。

作右衛門 そんなら、やっぱ、天主様の方がえらかとです。天主様の魂はいつまでたってん滅びんとです。流れんとです。

真哲 うーむ、とにかく、仏様は日本の仏様たい。日本の。

弥吉 天主様は人間の神様たい。人間の。

真哲 人間って何じゃ。人間って。いやはや、話にならん、手のつけられん。頭がどうかしとっばい。

中次 ああ、しからば、畏れ多くも禁裡様を初め、將軍様はいかに。

作右衛門 ……

中次 いか……そちたちは何と勘考いたしておるのか、聞かしてもらいたい。

弥吉 禁裡様も將軍様も、五体はおつたちと変わらぬ人間ですたい。人間はお作りなされたが天主様なら、禁裡様でん誰でん、天主様がお作りされたとばい。

真哲 無礼者っ。

助谷 これ、弥吉、これ……

中次 苦しゅうない。思うさまに申し述べさするがよい。これ弥吉とやら、しからばそちは、禁裡様よりも、將軍様よりも、そちたちのあがめる神の方が大事か。

弥吉 ……

中次 大事か。

弥吉 ない。ぜぜす様だけが頼りですばい。

まき (とりなして) ばってん、あのう、宗旨でなかことなら、なんごつでん、禁裡様や將軍様のお言いつけには従いましてござりますと。

中次 弥吉。もし異国の軍勢が、それはオランダでもよい、フランスでもよい、切支丹のばあてどもを先触れとなして、(と言いながら、懐よりグランピエルの煙草入れを仔細らしく取り出して) わが日本に攻め寄せて参ったなら、そのときは何といたす。

弥吉 へ？

助谷 そ、そら、そら、そら、(煙草入れをさす) な。

中次 そちはいずれの国にお味方いたす？ いずれの国に忠義をつくす所存であるぞ……

弥吉 へ？

中次 日本か、それともフランスか。

弥吉 どの国でんよかです。よかことばすることが、いっち正しかことじゃ、当たり前のことじゃ、そう言われる国ならどこでんよかです。

中次 まことか。

弥吉 おったち百姓は、同じ人間であっていながら、まっで人間の屑のごとあつかわれて来た。

お侍や地主や庄屋どんたちや……

助谷 おっ？

弥吉 懐手で楽な暮らしはしなから威張り散らすだけです。ところが、おつたちは年がら年じゆう、朝は暗かうちに起き、夜はおそうまで縄ないなどさせられて、三度に一度は芋飯や芋蔓の粥ですまさにや生きて行けんのです。

真哲 はは……そるが前世からの約束じゃ。業ごうというもんたい。

助谷 持って生まれた分際は守らにやならん。

弥吉 持って生まれたけん、そるじゃけん諦めと言わすとか。

助谷 (ひるんで) お、お……

弥吉 そんなら、おつたちば生んでくれた日本の地、水、火、風とやらは、よつぽど穢らしかもんですなあ。

真哲 わらあ、日本の悪口ば言いさえすりやよかとか。

弥吉 そういう和尚さんのお釈迦さんにしたところで、元来は唐天竺から渡って来た異国の教じやなかですか。

真哲 だまらんか。言わしておけば凶に乗って、百姓たる身分も忘れ、天を怖れず、お上をないがしろにし、かって放題なことばぬかしおる。お代官様、切支丹とはこのように大胆不敵なる非国民。到底、理を以てえ訓おしえ諭すごたることはできませんばい。

中次 うむ、うむ。

助谷 皆の衆、今のうちによようお詫びしたほうがよかぞ。お上のお慈悲にも限りがある。さ、お

詫びせんか。俺はな、わったちが可愛かとじゃ。日本人なら日本人らしゅうなってくれ、な、たのおけん。

作右衛門 切支丹じゃけん、

忠次郎

（同時に）切支丹じゃけん。

まき

作右衛門 切支丹じゃけん、日本人でなかとは思いまっしえん。

真哲 たった今、その若か者は、日本人でのもよかて言うたじゃなかか。

作右衛門 この者は血の気の多か盛りですけん、まあだ考えの浅かです。

助谷 惚れた女子ば転び切支丹にとられて、少し血迷うとるところで。

真哲 切支丹でん、色恋の出入りはあつとじゃな、はは……

弥吉 迷うてはおらん。正気じゃ。今では俺は、あの女子にお礼ば言いたかと。ほんとの魂の氣持、自由な氣持ば悟らせてくれたそのお礼ば。

まき （心配になつて）ちよ、ちよつと……自由たら何たら、あらんことまで言わんでよかとぞ。

作右衛門 もし、お上が鉄砲持つて戦に行けと言われれば、はいちゆうて参ります。相手がこの誰であろうと、お言いつけなら仕方なかとです。ばってん、切支丹ば捨てる、転べと言わ  
るるなら、どうかそるだけは……そるだけは、

まき おゆるしなされてくれませ。

一同 (弥吉を除いて) お願い申しまつす。

中次 これだけことをわけて諭し聞かせても聞き入れぬと申すのじやな。

一同 (平伏するのみ)

中次 この上は……好んでいたすには非ざれども、御法通りに取り計うより他はない。よいか、よつく承れ。わが日本は神国であるぞ。

真哲 (すまして) まことにしかり。

中次 いざなぎ、いざなみの二柱並に天照大神、雲上遙かにおわしませば、宇宙渾沌の間より、これら四つの島々、くらげなしただよう間より練り固められ国作りなてより、大神の子孫、世々相つぎて絶ゆることなく、豊葦原瑞穂の国を続べたもう。万世一系と申して、世界広しといえども、わが日本のみの尊き国柄なり。そのよろずの源は、すめらみこと天皇、神々を祭るにある。まつりごととはこのようにして国を治むることじや。

さて、仏はいかにというに、神々が表ならば、仏は裏に当たる。神々が玄関ならば仏は台所とでも申すべく、諸事勝手に往来を通わす気軽で便利なるもの。(真哲、抗議しようとする) これがお上によって許された教である。しかるに汝ら、南蛮渡来の邪神邪仏をあがめまつり、お上の説得をも聞かず、ほしいままに国法を破り、国を売らんずらん罪軽からず。先頃、フランス、エゲリス、アメリカなどの領事、公使、汝らを召捕りたるは不都合なりとの申出あり。

一同 (顔を上げる)

中次 さりながら宗旨のことは、わが国内の事柄とて、彼等紅毛南蛮の者の関するところには非  
ず。まして当今、將軍家と御門みかどと公武合体なし、彼ら夷を打ち払わんとする大方針と相定まっ  
た。異国は異国、日本は日本、国もちがえば御法も異なる道理なるを、あくまで耳傾けずとな  
ら、わが御法とはいかなることか、これより思い知らせずにおかれぬ。

助谷 ほれ、皆の衆、今のうちばい、今のうち……

中次 されば最後に今一度、どうじゃ、痛い目を見ぬうち、切支丹を捨て、わが国法に立ち返る  
所存はないか……ないか。

作右衛門 なんとしても、ござりまっしえん。

忠次郎 ありまっしえん。

まき うちも、

くら うちも、

しの うちも、

弥吉 無理が通れば道理ひっこむ。覚悟のほどばお目にかけまっしよ。殺すなら殺しまっせ。

中次 ふふ……殺しはせぬ。御法に従わせるまでじゃ。それが政治と申すもの……それ。(侍に  
目配せする)

侍、立って下手の襖をあける。

助谷 あのと、もし、いかがが相成るので？

中次 (笑って) 何なら、ご見物いたされるか。

助谷 見物？ へへ……

侍、手を挙げる。同心来る。侍、一同を物色する。

侍、弥吉の前に立ち、目配せする。同心、弥吉に縄をかけようとする。

弥吉 (怒って) 何ばすつとか。

侍 手向かいいたすか。

弥吉 (うなだれる)

同心、弥吉に縄打って引っ立てて行く。侍つづく。助谷権九郎は、「へへ……」ともみ手をしながら、

助谷 では、ちよっと…… (ついて行く)

弥吉が引き立てられると同時に、中次一平と祐筆とは立ち上がる。

真哲 お役目ご苦勞にござりまする。

中次 (窓から下を見て) おらんだ船が荷を下ろしているに見える、この度は何を持ち来たりしか。

祐筆 大方シヤムよりの赤砂糖でござりましょう。

中次 (歩きながら) いずれ、浦上の切支丹、総勢残らず……(期するところあり)

祐筆 は？

兩名一同の前を通過って下手に行きかかる。

祐筆 真哲殿は？

真哲 拙僧の役目は浄土の手引き。まだ少し早過ぎますたい。はは……  
祐筆 なるほど。

兩名去る。

鼓笛隊の行進曲、のどかに聞こえる。

しの 弥吉は、どげんさるつとじやるか。

くら ほんなこつ殺さるつかもしれんな。

作右衛門 拷問にかけて、転ばすとばい。

まき いっち気の強かことば言うつたばってん、あんげん勇ましかことば口走るもんに限って  
閉口へこた垂るつとも早かとたい。

間。

忠次郎 何やら太鼓や笛のしとるの。

しの 初めるときから聞こえとった。

くら 何じやろ、あら。

真哲 知らんとか、まだ。

くら へえ。

真哲 この頃は、先程のお侍のごと、足には長かずだ袋ばはくとさ。鉄砲ば肩にかついだ徒足かちの  
者が足並揃えて歩くときな、あの楽隊ば鳴らして歩きよかごとすつとばい。変わったなあ、ま  
ったく。

作右衛門 変わった。なんでん変わった。おったちの切支丹も、もうすぐ変わるばい。

真哲 ほう。どげん風に。

作右衛門 大浦のフランス寺のごと、浦上にも御聖堂おみどうが建つ。先年、こわされた御聖堂よりもつと太かたがきつと建つ。

真哲 はは……冗談言うな。今にあの楽隊つきのお侍たちが、裏の者らをこの日本から追っ払う日が来つとじゃ。はは……そんなときになっても、まあだわつたちや、切支丹しんごうば信仰すつとか、え？

作右衛門 する。

まき すつとも。

突然、下手の方で、「ぎゃあつ」と叫び声が鋭くひびく。弥吉である。

つづいて、「痛かあ、痛かあ、脛がくだくる……殺せつ、一思いに殺せ……畜生つ、殺せ……折るつ、折るつ、ううむ、あ痛あ……一思いに……殺せ、殺せ……ぜぜす！」

一同は思わず一かたまりになり、祈る。

一同 どうすばあてる、われわれんたまい。どうすひいりよ、われわれんたまい。どうすよっぺりとさんち、われわれんたまい……

作右衛門 弥吉、弥吉、痛かろう、辛かろう。ひるむでなかぞ、負けるでなかぞ。

まき 弥吉さん、弥吉さん。しっかりしまっせ。たのみます、たのみます……

弥吉の苦痛の叫び、急に絶える。悶絶したのである。

鼓笛隊の稽古は依然としてつづいている。

くら やんだ。

しの やんだ。

まき 殺されたとじゃなかろか。

真哲 かもしれんな。(窓の方を見ながら) なむあみだぶつ……なむあみだぶつ……

間。

忠次郎 次は俺の番か。

間。

真哲 長崎ではな、高島殿、薬師寺殿初め町の取締り役からお上に願い書が出た。ここできっぱりした処置ばつけにや、この先広がるばかりでどげんことになるかもしれんけん、切支丹の頭分は見せしめにはりつけにしたほうがよかてな。まったく、浦上ちゆうところは、なんして切支丹のはやつとじゃろの。

作右衛門 そらな、和尚さん。浦上の人間は、皆、善か人ですけんたい。善か人はこの世では、世の中の犠牲にならねばならんごとできとつとです。

真哲 まっで、そんなら、よそのもんはみんな悪人のごたる、はは……

侍、同心を従えて入ってくる。

真哲 いかかなされた、あの若か者は。

侍、それには答えず、次は誰にしようかと見定めた後、まきの前に立つ。

忠次郎 あっ。俺ば先にしてくれまっせ、俺ば。

まき ありがとうございますござりまっす。

同心、まきに縄打って引き立てて行く。

真哲 先の者は転んだとでござるか。

侍 (振り返り) 転んだのは庄屋でござる。腰を抜かしおって泡を吹いております。(出て行くが、ふと立ち止まり、何かを見定めて後去る)

残った一同、安心する。

四つん這いになって助谷権九郎が出て来た。

助谷 和尚さん……和尚さん、交代ですばい。交代。寒気がして、汗が一ぺんに引いた。ああ……

真哲 はは……そのざまは、はは……

突然、今度は上手から、「なしてしばらんとか……しばれ……うちばしばれ。縄ばかり、しばれ……」と呼ぶ娘の声が近づく。

そである。二三人の男の声で、それを取り鎮めている。「これ、さわぐでない。声を立てるでない。しばるときはしばる。やかましい。役所であるぞ。そうあばれてはならん、こ



やっぱ切支丹の掟にしばられて、善かことばして、魂はぜぜす様にお任せしとるほうがよか。  
そのほうがどげん自由で、人間らしかかわからん。さ、よかけん、もっと叩きまっせ。叩いて、  
叩きのめしてくれまっせ。大の男が三人も四人もおってできんとか。

また一発、ひっぱたく。

そでの声 もっと。

また一発。

そでの声 もっと。

また一発。

そでの声 もっと。

最後の一発。

そで、よろめきながら姿を現わし、倒れ伏す。(泣いている)

真哲 男かしゃんて思った、ふふ……

そで 痛かけん、悲しかけん、泣いとつとじゃなかとぞ……嬉しかけんたい。自由に切支丹にな  
れて嬉しかけんたい……嬉しかけんたい……嬉しかと……嬉しかと……

部屋内の四人の同宗者は感動し、女たちは涙を流す。助谷は頭をかかえて、隅に行つて打  
ち伏している。

真哲 ふむ。世も末か！ ……自由！ 自由！ おかし言葉がはやって来た……なむあみだぶ  
つ、なむあみだぶつ……

鼓笛の楽の音、長閑のどかなるうちに。

—幕—

## 第五幕

### 第一場

第一幕第一場と同じ。ただし夜である。

三つの丘の稜線が、ぼんやりかすんでいる。

川の流れの音。蛙が鳴いている。遠くで、鉄砲の音がする。助谷が夜撃ちをしているのである。

しばらくして蛙の鳴き声がびたりとやんでしまう。下手から、農夫甲乙の音がする。「よいしょ」「おっとしよ」「よいしょ」「おっとしよ」「暗かけん、早よ歩かれない」「重たかなあ」「昼間じゃいかんとへ、辰之助さん」「井樋の口でほんなこつ……」長持のような長いものをかっいで、「よいしょ」「おっとしよ」と甲乙が出て来た。

後から絆纏股引の辰之助が、火を消した提灯を持って出てくる。

乙 重たかなあ、だんだん重とうなって来た。

甲 いったい、何の入っとじやるか。

辰之助 文句ば言わずにさっさと歩け。

甲 さっさとは歩かれん。なして提灯ば消さにやらんとへ。

辰之助 何のために一両という大金ば渡してあつとか。さ行け、歩け。

乙 ばってん、西役所に納むるもんなら何もこそこそ運ばんでよかりそうな。

辰之助 提灯でんつけとつたら、夜撃ちばかけとる権九郎の目にとまって、間違うて撃たるっぞ。

乙 はは……あの庄屋さんならやりかねんけんのう。

甲 後棒、肩ば替ゆ。

乙 おつと。よいしょ。(替える)

甲 軽かごとして重たか。

乙 重たかごとして軽か。

甲 よいしょ。(歩きだす)

乙 おつとしよ。

甲 よいしょ。(歩調に合わせて) 村の切支丹ども流さるる。

乙 おつと。言うこときかんけん流さるる。

甲 よいしょ。長州萩のご城下へ。

乙 おつと。お隣り、津和野のご城下へ。

甲 よいしょ。飛んで備後は福山へ。

乙 おつと。海山越えて流さるる。

甲 よいしょ。総勢百と十四人。

乙 流れの果ては、きり、死、たん。

甲 よいしょ。

乙 おっとしょ。

辰之助 たのおけん、懸け声は出さずに歩いてくれんか。

甲 そら無理たい。

乙 懸け声は出さずにや、こげん重たかもんはかつがれん。おい、ちよっと、休も。(荷をおろす)

辰之助 今出たばっかじゃなかか。よし、そんなら、もう一両はずむけん、だまって、そうっと、

早よ、歩いてくれませ。

甲 だまって、そうっと、早よ。

辰之助 井樋の口まででよか。そこからは舟で運ぶけん。

乙 半道もつとあるばい、井樋の口まで。

甲 遠かなあ。

辰之助 何ば言うとか。十町もなかじゃなかか。

乙 そら、手ぶらでぶらぶら歩くときたい。

甲 そうたい。

辰之助 そんならもう五両、五両出そう。

乙 五両。一人前か。

辰之助 うむ。その代わり、初めに約束したごと、誰にも言うな、よかか。

甲 よか。相棒、行こ。

乙 行こ。おっとしよ。

甲 よいしよ。

辰之助 しいっ。

乙 (小声で) おっとしよ。

甲 (同じく) よいしよ。

黒い帽子に黒い長マントを着た人影が、一行の前に立ちはだかり、前の棒を押える。

甲 やあ。

乙 なんした。

甲 (怖々に) こ、こ、こら。

乙 お、お、お……

棒、押し返される。

辰之助、前が出る。

辰之助 誰か……誰か……庄屋敷から西役所へご奉納の品だるばい。邪魔すつとただではすまんぞ  
……そこばどけ……どけ……どかんぎりや……斬るぞ、（小刀の柄に手をかける）やい、二人、  
かかれ。

甲は棒を持ち、一人は素手で、また辰之助も刀を抜いて黒い男に立ち向かう。一種のだん  
まり的立ち回りの後、黒い男、荷物の上に乗る。

辰之助 誰か……誰か。

甲  
乙 } 名ば名乗れえ。

黒い男、帽子をとり、外套の紐をはずすと、するすると下に落ち、夜目にも鮮やかな白絹  
の長い衣が現われる。胸から十字架を垂らす。キリストにも似ている。

「うわあ、出たあ」と叫んで、甲と乙は、一散にもと来た方へ逃げ去る。

辰之助も数歩下がって、

辰之助　だ、誰か……貴様あ。たとえ、地獄からの使いじゃろうと何じゃろうと……

白衣の男は、長持からおり、見おろしながら手真似をする。と、被い布が落ち、長持が現われる。

辰之助　あ、それは……こうなりや、俺一人でかついで行く。中身はたかが死に殻たい。何の重

たかことのある。(長持を背中にかつぐ) やい、そこばどけ。どけっ。

白衣の男　あわれみのおんふはふは、こうびにてましますおんみにおんれをなし奉りて、わいらが一命かんめいたのみをかけ奉りて、ろれんとなるようなえいわな……

辰之助　どけ。どかんか。

白衣の男　この身にしゃげびをなし奉りて、この涙の谷にうめきなきして、おみいにねぎやいをかけ奉りて、これによってわれらがおんとりなしの……

辰之助　(叫ぶ) や、急に荷物が軽くなった。(長持をおろし地面に縦に置き、急いで蓋を開く)

中は空であり、ただ、一房の長い髪の毛が垂れ下っているだけ。

辰之助 あいたあ！ ……こい！ こい！ たしかに入れたはずばってん ……こい！ ……こい！ (その髪の毛を手にもって探し回る)

辰之助が騒ぎだした頃から、白衣の男が「ばあてる・のうすてる (主祷文)」を唱えている。やがてそれに低く唱和する三つの丘の声である。

白衣の男 Qui es in coelis Sanctificetur nomen tuum. Adveniat regnum tuum Fiat voluntas tua, sicut in coelo, et in terra. Panem nostrum quotidianum da nobis hodie: Et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimittimus, debitoribus nostris. Et ne nos inducas in tentationem: sed libera nos a malo. Amen.

(これは「どちりなきりしたん」によれば以下のような文句になる。「てんにましますわれらが御おや御名をたつとまれたまへ。御代きたりたまへ。てんにをひておぼしめしままなるごとく、ちにをひてもあらせたまへ。われらがにちにちの御んやしなひを今日われらにあたへたまへ。われら人にゆるし申しごとく、われらがとがをゆるしたまへ。われらを

テンタサンにはなし玉ふ事なかれ。われらを凶悪よりのがしたまへ。アメン

辰之助 やめろ。そのオラツシヨばやめろ。俺はなんも悪かことはしとらん。……しくうつ・え

と・のす・でいみっちむす……俺はいやじゃ……いやじゃ……

白衣の男 ゆるしを願ひ奉れ、辰之助よ。

辰之助 俺はなんも……悪かことはしとらん！

白衣の男 悔い改めよ、辰之助よ！

辰之助 いやじゃ、いやじゃ。

白衣の男 ああ、主よ……己が罪を知らざればなり。おん心のままに……（闇に消える）

丘たち、もこもこと動く。

中の丘 こい、はここばい、あんしやま。

辰之助 へ？

右の丘 ここ、ここ、あんしやまあ。

左の丘 ここ、ここ。

こいの声 ここ。ああた、ここ。

辰之助 おう……どこ、どこへ。

こいの声 ここ、ああた、ここ。

辰之助 ど、ど、どこへ。(あわてて、提灯に灯をつけて) こい……こい……どこへ。

こいの声 ここ……ここ……

辰之助 どこへ。

中の丘 とこしえの安みの場所すばい、たましいの。

こいの声 おいでませ。ああたの船も、ああたの海も、ここから見ゆる。おいでませ、おいでませ。

辰之助 おう、そこか！(提灯を高く掲げて) 今、行くけん……

前よりも近くに鉄砲の音。

辰之助 ひゅっ！(苦しそうに) どけ……どけ行くとか、俺ば……どけ連れて行くとか、俺ば。ぜぜす！(提灯と共に、彼のからだは堤の下に落ちて消える)

川音が急に高くなる。

こいの声　ほうら、見えたでしょ。ずうっと向こうに。さ、手ばつないで一緒に行きまっしょ。

白衣の男は、黒い帽子をかぶり、外套を元のように着て、再び現われる。

白衣の男　せど・りべら・のす・あ・まろ・あめん！

声だけで姿はほとんど闇にのまれたか見えぬ。

静寂、蛙の声がまた始まる。

忍び足で、甲と乙が戻って来る。

甲　おらん。

乙　誰もおらん。

甲　辰之助さん。

乙　辰之助さん。

甲　（箱を見つけて）あ、あ、あすけ……

乙　なん？　あ、あ、ま、また出たか……

甲　ちよ、ちよっと待て、待て……。　（よく見すかして）あら、人間じゃなか。

乙 ほんなこつ。……動かん。

兩人傍へ寄ろうとする。

長持、地面へ倒れる。

兩人 ふわ、ふわ、ふわ……（腰を抜かす）おた、おた、おた……

ラテン語の「サルベレヂナ」の合唱起こる。これを訳すれば、「あわれみの御はは、皇妃こうひに  
てまします御身に御れいをなし奉る。我等が一命、甘味たのみをかけ奉る御身へ御れいを  
なし奉る。流人となるエハの子ども御身へさけびをなし奉る。此なみだのたにてうめき  
なきて云々」（どちりなきりしたん）という最も主要な祈禱文の一つである。丘たちや白  
衣の男の祈禱はこれが大分訛っている。明治七年、司祭プチジャンが刊行した「聖教日  
課」中にはこうなっている。

「憐みの御母皇后にて在す我等の一命甘味頼母敷御身に御礼を成し奉る。流浪人となる  
厄娃えわの子供が御身に叫びをなし、又此涙の谷には号なげき泣いて御身に願なげい奉る、云々」

鉄砲を片手に、第一幕の獵衣に身を堅めた助谷が手探りで出て来て、甲に突き当たる。兩  
方とも恐怖の叫びをあげる。

助谷 (起き直り、怖る怖る) 頭は丸くのっぺら棒、闇にも白か肌の色、目ん玉赤く飛び出して、これこそ名高き海坊主。肥前は玉の浦から、この浦上に丘上り、手応えあったと思ったと、はて、いずこにかは、つて逃げた……

甲と乙 庄屋様あ……

助谷 (へっぴり腰で鉄砲を構え) に、に、に、人間かあ。

甲 見まっせ、あ、あ、あるば。(丘の方を指さす) あるば。

中の丘が右の腕で、合唱を指揮している。

— 暗転 —

## 第五幕

### 第二場

前の合唱つづいて、丘たちのまわり明るくなる。

前舞台には誰もいない。

合唱低くなる。

中の丘 哀しくもおとろしく苦しか日々を、わいらは百年も二百年も過ぎして来た。ばってん。

右の丘 待ちに待った日の、どうやらやっと、

左の丘 来たとばい。

中の丘 生まれ故郷ば後にして、

右の丘 長州萩に六十人、

左の丘 同じく津和野に三十人、備後福山には二十人、

中の丘 別れ別れに流される。

右の丘 やがて浦上は空になる、皆行ってしまうときの来る。

左の丘 空になろうと浦上の魂は、

中の丘 この丘の上にただよって、

右の丘 ただよって、

左の丘 いついつまでも朽ちることはなか。

中の丘 なまあたらしか血ば噴き上げて、

右の丘 まことの命の音ば高鳴らすと。

左の丘 犠牲いけにえの血のたぎる音たい！

下手からうつろな歌声が聞こえ始める。

「わたしの胸に、きてちようだいな、いつもなつかし、ぜぜすさま……」

乱心したなみが、はだして、よろよると出て来る。鳥籠を持つ。

なみ 白いほすちあ、ぜぜす……たつのすけ、どけ行くと。うちも連れて行って……うちも一緒に。待ってくれませ、たつのすけ……たつのすけ、どけ行くと……（上手へ消える）一緒に行くけん。辰之助……辰。

再び、サルベレヂナの合唱起こる。

なみの後をつけて来たように、黒い男が出て来て、なみの去った方へ両腕を差し上げる。

黒い外套に白い衣の男　ぜぜす！　お救いなされ候よ。女えわを！　その罪の子供たちを。お救いなされ候よ。

丘たち　（十字を切り）あーめん。

黒い外套に白い衣の男　（正面奥に向かい）丘よ、丘よ。もろもろの生命の音噴き上げて、花の如く散りましてござる。美しく、ふはかなくもろく、（泣いている）ふほろふほろと散りまして……でござる……つかの間に露と消ゆるが生命か……哀れいとほしやな……

合唱つづいている。

黒い外套に白い衣の男　（両眼にあてた手を離し）さあれ今こそ、まことの生命、とこしえの生命の尊きを、今こそきつと知り申してござる。主よ、より高き生命の音をこそ……より高き……それは、すべてなにごとくも天主にゆだね、平らかにへり下り、私を去りて隣人の身に想を馳せ、常につつましく……つつましく……

いつの間にか堤のこちらの側の下には、女ならば白いヴェールをかぶり、村人たちが数珠を手に膝まずいて丘を見上げて歌っている。

合唱昂まる。

—幕—

八世紀の初め、和銅年間、諸国の風土記を奉れとの仰せありて追々に集められしものの中に「肥前風土記」もあつたであらう。されど今に遣れるは後人の偽作なりと推測さる。ここに再び僭称して肥前風土記を作る。もとより贋物なり。ぼんじやりと史実には則りたれど人物はすべて創作なり。宗教と芸術のたたかいの果てに、よしさらば、「浦上靈異記」とでも名づくべきものを。

(昭和三十一年六月一日 作者付記)

底本

『現代日本戯曲大系 第三巻』

株式会社三一書房

一九七一年七月三十一日 第一版第一刷発行